

352



始



野原 草

望廣の柏丸

特231
390

望展の柏丸



疾是
正道
志道
非正
本仕

丸柏店歌

(1)、耀く波や洞の海

瑠璃盤上に影宿す

高塔山の翠緑こそ

げに若松の繁榮なれ

自然の恵み讃えつゝ

若き吾等に希望あり

(2)、建業遠し幾尾霜

旭日映ゆる丸柏に

匂ふ店史の華承けて

萌ゆる心のあさぼらけ

仰ぐ理想の嶺はるか

壯き吾等に使命あり

(3)、見よ、北筑の空高く

商道奉仕報國の

聖き店是を翳すなる

協力自磨の樂園に

燦たり、正氣薫りつゝ

若き吾等に覺悟あり

(4)、あゝ腕鳴りて胸躍る

雄飛の天地視野に俟つ

懸軍萬里いざ一路

ゆくては汎しわが同志よ

起ちて謳はむ朗かに

壯き吾等に力あり



店祖の面影と自署

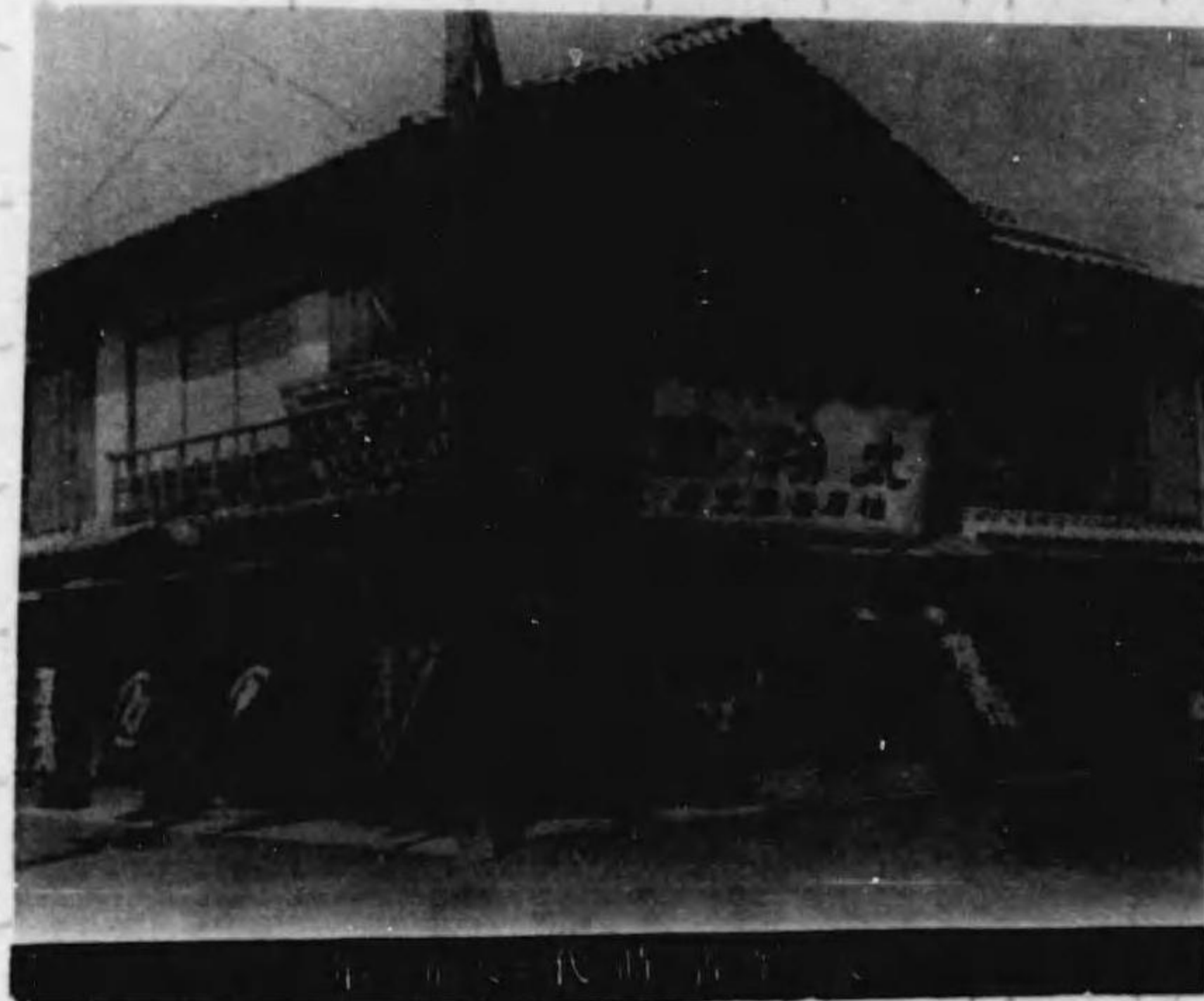
柏原善三郎



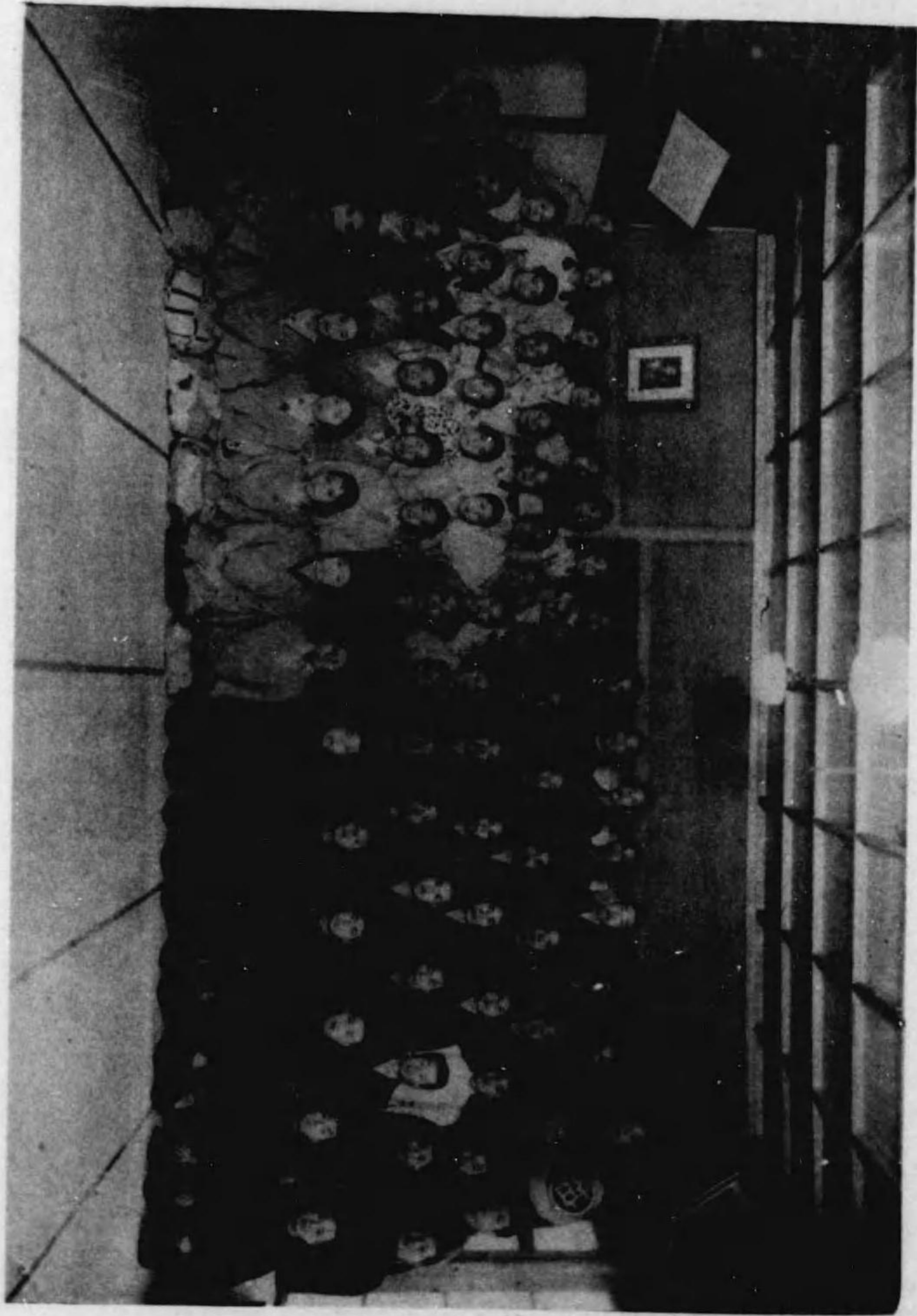
店主の近影自署

松原善房

店 舗 の 變 遷



(昭和十一年二月十七日下關要司署可換)



[The right page of the album is blank and contains no text.]



現在の店舗



（昭和十一年二月十七日下野要司部可濟）

本書を繙かるゝ方へ

この書は、丸柏内、柏苑會
の編修にかゝり、同人の手
記であることを、御含みの
上御覽下さい

一粒の實を、大地に播いた。

x

やがて——幾日……

そこから芽をふき、可愛い双葉が覗いた。

おゝ！ 生命の神祕！

一粒の實には、いのちがあつた。

双葉は幼樹となり、幼樹は、風雪の洗禮をうけて亭々たる大樹への約束を持つ——

生命あるもの——それは 必ず發芽し、成長する

偉いなる力に、育まれて

あるがまゝに

潑瀾と伸びゆく姿——

まこと！

名状を 超えたる

盛觀であり、壯美である

x

序

今、柏苑會同人の筆に成る「丸柏の展望」を讀破し、丸柏の發展に驚嘆すると同時に、潤飾なく銜氣なく、事實其者の記載であるに拘らず、行文力あり潤ひありて、語短なれども余韻翳々、讀む人々の理解と想像に訴へる、筆力の妙諦、唯感嘆の外なしであつた、一氣呵成の讀了後、茫平なほ書裡逍遙の思ひありて、よくも輕妙の筆に丸柏の事實史を趣味の感興裡に、しかも有の儘に述べられし處、蓋し獨歩的記述かなと、内容の一部に觸るる余には、殆んど理解もせられ領かれし事として、讚嘆措く能はずであつた。

本書中に發展途上の一難排去、又一難の奮闘史は云ふに及ばず、開祖の人格と決意は勿論、店員への激勵、さては將來の期待と逐時の展開など、此書を読まむ人々に、刺激も與へ感激も起し、反省も促す事であらうかと、此書の尊さを覺ゆるのである。わけても末段開祖御夫人の追懷に至つては、情緒綿々、涙潜々たるものがある。

茲に筆者の勞を謝し、「丸柏の展望」なる一卷は、丸柏永遠の生命を傳ふる一店の歴史にして、しかも或種の文獻たるを喜びつゝ、其貢獻の尠からざるを賛す矣

昭和十年五月五日

於横濱寓居

五十嵐長之丞

緒

×

夢である……

まさに白日の夢である——

うすぎぬを透して眺める、あのなつかしい思ひ出の繪卷——

花が散る　　春であらう、

星が降る　　秋になつた、

嵐の日——霜の晨——そして又春は訪れる。

夢か　あらず

夢ならぬ夢に編れたる

おゝ　榮光に輝く吾等の店史——

やがて——

白日の夢は、まだ見ぬ彼方の幻を描く、……

曰く何、——曰く何……

幻影は想像も及ばぬ方面に進展する、

そして、若き人々の理想は實現し、雀躍する姿がありくと浮ぶ、——

夢の世界は自由である、

×

空想の兒を嗤ふ勿れ——、

昨日の丸柏は、今日の丸柏でなかつた、同様に、明日の丸柏は、今日の比に非らざるを信ず、

刻々、展々、寸瞬の休みもなく、丸柏は成長し、躍伸する、今後の五年は、過去の十年に相當し、來るべき十年は、往ける二十年に勝るであらう、

而して空想の實現、夢想の招來せらるべき日を待望する、

幸ひに閑を惠まれて、この書を編むと雖、固より其器にあらず、與へられたる机上

の史實に、覺束なき追憶の衣を纏はしめ、なほ及ばざる創成時代の情景は極めて簡に辛じてその責めをふさぎたるに過ぎぬ、

殊に、微細に亘る變遷の過程はこれを省略し、重要性ありと認めらるゝ部分のみを年代順に記述せし所以は、本書の目的に制約せられたるが爲である、

算盤を一枝の筆に代へて、しばし机邊の塵を拂へるもの——修辭の道に暗く、支離滅裂は掩ふべくもない、

只、丸柏の實相を、心で視、心で認めたる内容に對しては、掬すべく、何人も異議はないであらう、

繙く人、——強記せよ！

この書は、昭和十年四月現在に於ける一切を含む丸柏の店勢であり、素描であることを——

随つて、明日の丸柏は、既に別個の新しき存在である、

題して、「丸柏の展望」と云ふ——

x

春——花の霞みに、のどかである、

ハラ／＼とこぼれる、さくら！ さくら！

その一片づゝを茲に集めて、上梓し、美はしき兒等の心と共に、今は亡き 店祖と、店母のみ前にさゝぐ——

夢である……………

まさに白日の夢である——

x

昭和十年の盛春

高塔山麓の寓居に於て

編者識

目次

第一篇 店史四十八年

1	島の揺籃	丸柏の發祥	一
2	生命あるもの	店祖出郷より開店まで	九
3	伸びゆく双葉	開店より財界バニツクまで	三六
4	焦土の更生	類焼より復興まで	三七
5	百年の大計	懸賣全廢前後	四〇
6	進展の一路	吳服商組合脱退	四六
7	劃期的飛躍	土地購入新築擴張	五三
8	店祖の長逝	昭和二年	五七
9	遺影芳ばし	店祖の逸話	六〇
10	旭日は昇る	新店主登場	六六
11	再度の試練	倉庫の類焼	七三
12	評やく新陣容	別館新築竣成より結社まで	七九
13	逝ける店母を偲ぶ	昭和十年	八五
14	使命は重し		九一

第二篇 現全容の鳥瞰

1	店勢の概況	昭和十年四月現在	一七四
2	店舗の參觀	全	一八〇
3	別館の紹介	全	一九三

第三篇 丸柏のプロフィール

1	蔭に匂ふ恩縁の人々		二〇三
2	事實が語る吾等の誇	昭和十年四月現在	二三三
3	陣營を護る同志の群	全	二三一
4	編者の言葉		二四三
5	「丸柏の展望」を讀みての思ひ出	五十嵐長之丞	二四九
	編終餘滴		二五九
	追補		二六三

第一篇 店史四十八年

—(明治二十一年—昭和十年)—

店史の序

野に薫る 一輪の花――

その美しさも、咲ける日に 咲けるにあらず、幾日、幾十日、否、幾百日の準備時代があつた。

時めく榮光の陰には、必ず血と汗との苦節がある。

吾等の店――

今や、漸く 基礎時代の幕を閉じて、順風満帆、多望の大洋に、鵬翼を伸べんとするに際し、靜に貴き店祖の遺業を偲び、波瀾五十年の苦闘を回顧しては、とび／＼に、店の歩みの跡を尋ね、内省の資、奮起の糧たらしめたい――

忘れ得ぬ、初代店主の、奮闘録は、そのまゝが、輝く吾等の店史である。

隠れたる、礎石への努力――

それは、仰ぐべく、讃すべき偉大なる教訓であつた。

初代、善藏翁の生涯は、全く、働きの權化であり、慈父の典型である。生前親しく聲咳に接し、膝下に薰陶を蒙りし人々にとりてこの店史こそ、こよなき慰めであり、感謝の思ひ出であろう。

況して、後進の若く幼き人達の爲には、異例の感激であり、新しき使命の發見であらねばならぬ。

見よ！ 今——東雲の空をついて、まさに昇らんとする太陽の神々しさ！

あか／＼と燃え、やがて、燦然たる光彩を四表に照被せんとする——

あゝ、大自然の默示！

吾等は斷じて、斯界の太陽たらねばならぬ。

店祖が、躬を以て編まれたる青史の理想こそ、實に聖なる遺訓である。

野に薰る、一輪の花——

靜かに史を按ずるとき、可憐なる花の心を思ふ

島の搖籃

丸柏の發祥
——明治二十一年——

備後、尾道市を南へ、海上三里、瀬戸の波、渚を洗ふ、周圍七里餘の島がある、現在二つの町と、五つの村を以て組成され、香くはしき、オレンヂの華咲くところ——その名を因島と呼ぶ。

島の中央に、現在戸數六百五十、人口三千餘の閑靜なる村落がある——

全村、殆んど農——未まだ時代の流れに染まぬ、野趣と、純朴の氣風を留め、美しき自然の心そのまゝを思はせる。

こゝこそは——實に「吾等の丸柏」發祥の地、廣島縣御調郡中庄村である。

東に紺青の海を望み、西に聳ゆる青影城址は、全山千古の翠綠を湛へて、——南朝の忠臣、贈正五位、村上義弘の偉功を語る居城の跡——島の誇りの一つである。遡る五十年の昔——内海の風は靜かに、潮の薰りも、長閑であつた。

店史四十八年

島の搖籃

繪の様に、點々と浮ぶ、あの島山——
朝は陽に映ゆる金鱗の波上から明け、夕は鎮守の杜の彼方——燦めく星のまた
ゝきに暮れる——

その頃も、瀬戸の景色に變りはなく、大自然の恵み豊かに
島の生活は平和であつた。

x

慶應三年十月六日——

先代店主は、此處に寺岡屋の長男として呱呱の聲を擧げたのである。

腕白の少年時代を山間の生家に育ち、所謂寺小屋通ひと、農業の手傳ひとが
日課であつた。

小川の流れ——山のさゝやき

自然の温かき懷ろに抱かれて、いつしか夢の様な幾年かゝ去來し、

彼にも血の湧く、青年期が訪れた。

x

當時、彼の家は農業を營みたるも、父は若き頃より病弱の爲、農耕を爲す能はず、幸ひ文筆に長じたるの故をもつて、村役場、登記所等に出仕し、村でも相當の地位であつた、随つて、彼は幼少の頃より、一家農事の責任者として、立つべき運命を擔つてゐた。

しかし、その頃の農村に於ける勤勞と質素の標準は、殆んど想像の外であつた況して嚴格なる家庭に人と爲りし彼に例外のあろう筈がない。

半世紀前の農村文化の程度は、眞に原始時代のそれに近かつた。

螢雪の功と云ふ勉學の形容詞も、單なる詩家の寢言ではなかつたらしい。

彼にも峻烈なる境遇が與へられ、全生活を擧げて、陶冶されるのであつた。

早曉、星を仰いで起き、田に畑に、終日働き續けたる上、夜は、燈芯に菜種油

島の捕鯊

を注ぎたる、ほの暗き行燈の下——深更まで、或は、繩を作り、草鞋を編み、又は、米を搗き、水を汲む——

そして、床に入るのは大抵、鶏鳴の頃が多かつた。

しかも、平素は、麥と甘藷を常食とし、米飯は、お盆と、正月の幾日かに限られてゐたと云ふ——

驚くべき、事實である。

牢記せよ、嗤ふを止めよ、——

世界の驚異、躍進日本、今日の地歩は、實に、かゝる農村生活に依つて、築成宣揚されたのであつた。

心せよ！

一握千金を夢み、出世の近道を漁る、現代の若き人々——

傑出せる各方面の人材は、悉く、如上の辛酸を嘗め來れるもの——事實は何も

のにも勝る雄辯である。

なれど——

彼は終生を、島に埋れる心算はなかつた。

目に見えぬ天然の彩管に、四季とりく、美しく装はれてゆく瀬戸の風物——

陽炎は燃え、大地は微笑んでゐた。

而し、青年の血潮たぎる、彼にも、人知れぬ押へ難き鬱勃があつた。

殊に生來の短軀は、生涯を農業に托すべく餘りに貧弱であり、体力の點に於て

到底人並以上の成果を望むことは不可能と知つて、遠望雄飛の熱慮は堅かつた。

時に、織物販賣、又は酒、醬油の醸造を志し、或は、遙々大洋を越えて渡米を

夢みる事さへ、一再に止まらなかつた。

若き魂に芽生えた青雲の志——

それはどうする事も出来ぬ——決河の勢であつた。

店史四十八年

x

……島の山々に、みどりか萌えて、眞黄に染め出された菜の花島——
春蘭けて、四方の眺めは、目にしむ程の麗はしさ——
その或日——彼は父に對して歎願した。

『——私……感ずる處があつて——色々考へた結果、これから少し商賣をして
見たいと思ひますが——許して頂けませうか——……』

異狀の決意が眉宇に刻まれてあつた。

彼が熟慮に依る、最後の斷案であり、唯一の活路である。
兩親の前に端座して、生涯の方針を説き、覺悟を語るのであつた。
しばし沈黙は續く……

裏の雜木林から、名も知らぬ小鳥の囀がきこえる——
やがて、謹嚴な父の聲が、あたりのしづまを破つた。

『餘程の覺悟らしい……が——この村で商賣に手を出して成功した者は一人も
ない——……』
言葉は一寸切れた。

『……しかし、お前が、腕一本でやつて見やうと思へば——それもよい、父祖
傳來の財産に指一本も觸れぬ——條件が一つ——それさへ承知なら許しませう
……くれぐれも短氣を出さぬやうに——堅い商賣が大切じゃ——……』
哽れた父の聲には、威嚴と、慈愛が籠つてゐた。

x

許されたる彼の驚喜——そして感謝
昇天の心地で、門出の用意に着手した。
然るに——彼には資金が皆無であつた。
なくてはならぬもの——それが無い。

島の搖籃

約束の手前、兩親から出して貰へる筈はなかつた。

遂に、彼が幼少の頃より貯へたる、零碎の貯蓄を全部はたいて見れば、あるにはあつた。

驚くべし！

僅かに三圓六十八錢——

しかし、彼は平然たるもの——その虎の子を堅く握りしめて、雄々しくも起ち上つた。

時は、明治二十一年。先代店主、二十二歳、立志奮起の春であつた。

×

——既に、矢は弦を離れた。

雄圖は搖籃を出で、黎明の巖頭に立つ！

晴か、雨か。

生命あるもの

出郷より開店まで
——明治二十二年——明治四十三年——

投下總資本金三圓六十八錢也——

それは、餘りにも貧弱なる少額であつた。今更どうすることも出来ぬ現實である。

只、頼るべきは、不屈の精神と、不撓の熱誠である。

彼は先づ、島に出来る手織木綿の行商を開始し、約一年、島内を賣り歩いて、

店史四十八年

生命あるもの

働き乍ら、商ひの道を學んだ。

翌——明治二十二年

漸やく、商賣なるものゝコツを會得するや、當時九州通ひの帆船に便乗を求め
單身雄飛の第一步を、北筑の漁村、若松——に印したのである。

その頃の若松は——まことに淋しい磯邊の村落にすぎなかつたといふ。

西の涯——

見も知らぬ地に、初旅の鞋草を脱ぎ、彼は何を思ひ、何を感じたであろう。

枕に近く玄海の風浪を聞き、遠く故郷の山川に心を馳せるとき——胸迫る旅愁
に憮然たらざるを得なかつた。

況んや、東西模糊として、望洋の歎を久しうせざるを得ぬ當時を追想し、感慨
いと深きものがある。

x

建創の業は難い——

若冠、二十三歳の彼は、千仞の懸崖に、今その一步をかけんとする。

翌日から——

五尺に足らぬ矮軀の若者が、百反に近い手織木綿を背負て、

村から村へ——郷から、郷へ——或は、海邊づたひに、或は山又山を越えて、

行商に奔命する姿が見えた——

雨の日も、風の日も、雪の日も、嵐の日も、若者の休むことはなく、村々を賣
り歩くのであつた。

若者は、無論、彼である。

朝は未明に宿を出で、夜は月影を踏んで歸る、宿も名のみ船問屋の一室に過
ぎなかつた、今の本町一丁目、若戸渡船場に近く、須口屋と云ふ。

宿に歸れば終日の勞を洗ふの暇もあらず、計算、記帳、整理、注文等、全く不

生命あるもの

眠不休の奮闘である。

農村で鍛えた体力は、この働きを扶けて役立つに充分であつた。

x

日は去り、月は流れる――

刻苦奮勵、實に死力を盡しての辛酸である、成敗を超えての精勤である。

加ふるに、性來の誠實と、親切、正直と忍耐とは、いつまでも地中に埋れてはゐなかつた。

年と共に、郷人の認むる處となり、正藍手織縞の聲價は、漸やく、遠近に擴まつて行つた。

不斷の努力は、何ものをも征服する。

倦むことを知らぬ精進は必ず酬ひられる。

彼の足跡の存する限り、彼の華客があり、地盤は日と共に強化を加へてゆく――

若松、小石、脇ノ浦、脇田、二島――島郷一圓の村人と、港に出人の舟人とは、まさしく彼の華客圈内にあつた。

x

かくして――

一年は過ぎた。

寧日なき、苦闘には、彼の血と汗と、そして涙とが、織りこまれてある。

店を持たぬ、一介の行商者としては、破格の躍進であつた。

春と、秋と、季節の變り目には歸郷して、農繁期を田畑に勞作し、其上仕入と

諸種の整理に奔走し、用を了へれば匆々として、下若するのが常であつた。

この年――

兩親の勧めもあり、良縁を恵まれて、新生活が初められた。

新婦は、徳衆に秀で、まことに、こよなき好配である。

店史四十八年

生命あるもの

明治二十三年、彼が二十四歳の時であつた。
然れども——

彼には、漫然と、新婚の夢を逐ふ餘裕はなかつた。

若き妻は、父母の膝下に残し、初陣の誓に背かじと、異郷に淋しい、獨居の健闘を續ける——

明治二十四年、若松村は、若松町となつた。

商賣の自信もできた。

この頃、反物を販賣し、その代償として、筑前蠟燭を貰ひ、所謂物々交換等もなしたものである、この蠟燭は、郷里に持歸り、實妹アサ氏をして、行商せしめるのであつた。

アサ氏は、前店主の爲に家郷に於て、手織木綿、足袋等の仕入を擔當してゐられたのである、當時手織綿は、反三十八錢乃至四十錢位であつたと云ふ。

かくして、——
年一年と、前進に拍車がかけられる。

——幾度か夏を送り冬を迎えた。

x

明治二十七年五月二十四日——

彼が後繼者、現店主、生誕の日である。

父となれる喜びに變りはない、と同時に責任の加重は彼を驅つて、益々事業への精勵を深めるのであつた。

天は自ら助くる者を助く——

遅々たる牛の歩みにも撓まざれば千里又遠からず——

先代店主の足跡は、實に、古聖の金言をそのまゝ踏襲されたかの感がある。

生命あるもの——

店史四十八年

生命あるもの

それは進展し、成育する。
魂をこめた仕事は不滅でなければならぬ。彼の働きには生命があつた。

この年の秋——

不幸にして病魔の犯す處となり、不測の大患に入院を餘儀なくせられ、止むなく郷里より實妹カズ氏（當時十八歳）を呼び看護せしめたのである。カズ氏は看病の傍、兄の命に従ひ行商も手傳ふことがあつた。

x

又——時は矢の如く過ぎた。

立志、出郷八年、孤軍奮戦の勞は無形の信用と、有形の財として酬ひられ歸郷の度に輝かしい存在として、郷黨羨望の的であつた。

しかし——

幾人かの愛兒を持ち、人の子の父として、次々に新しい心の重荷を感じる頃、

一家の全權も譲られ、責任の重大は今更の如く身邊に押し寄せてゐた。

明治二十九年——

販路の擴大につれて、手織木綿の自家製造を計劃し、其意願成るや破竹の勢をもつて郷里と若松の往復も繁くなつた。

無論足らざるは、隣村同業者の製品を従前通り仕入れて補ふ——

げにや、東奔西走——真に席の暖まる閑なき、熱火の活動は、一家の支柱たるべき、彼が自覺の迸りである。

當時、機場の全責任は家郷を守る初代店母の心血を以つて之に當らしめ、尙店祖の實弟、幸太郎氏は、教職の傍事務的補佐として、店祖が後顧の憂ひを拂ふに充分であつた。

店祖にとりて、商賣は眞に人生のすべてあり、最高の目的である。

忠も、孝も、信も、義も、正しき働きを通してのみ、初めて價値ありとの信念

店史四十八年

生命あるもの

は、不動のそれであつた。随つて、故郷の家庭には止むなき寂寥を興へ、無論翁も甚大の不便と苦痛とを忍ばねばならなかつた。

『商賣の爲に、家庭的に不自然生活をして來たことは、矢張り無理であつた。』

店祖が晩年の述懐である。

若き日に、疲れたる魂の慰ふべき、時と處とが、餘りにも没却されてゐた爲であらう。

匆忙の中にも、愛する家庭の人々と、せめて幾日——楽しい團欒がほしかつた人生の大半を遠く、別居して過さねばならぬ家族の空虚さは、何ものを以ても償ひ得ぬ淋しさであつたと云はねばならぬ。大なる犠牲ではあつた。

古來、建設の蔭には、必ず、貴い人柱の物語りがある。

先代店主が、今日の大を招來せし裏に、愛の人、涙の人——節婦の譽高き故店

母の偉徳を忘れてはならぬ。

——さあれ、

當時の彼には、初志貫徹の爲に、一切を顧慮するの閑は興へられなかつた。心にはかけながら、勢の赴くところ、環境の支配に任したのであらう。

× 時代は、變遷する——

やがて若松も市制施行への日近きを思はしめる、輝かしい前途は、彼をして雀躍せしめるのであつた。

有望視される職業には、必ず強敵が現れる。

同業の誰彼が、それ／＼成功して、店舗を構へ、新興呉服に依る挑戦には、かなりの刺戟をうけたものである。

只、唯一の強みは、扱商品が、他に類例なき、正藍手織縞なるが故であつた、

店史四十八年

生命あるもの

十六手の太糸を昔ながらの植物性正藍染とし、手織機にて、織りあげしもの——
労働者として、一躍人氣を博せしも當然である。

如何なる競争者も、徹底せる誠實と勤勉には抗する術のあるべき筈はない。
固より彼は、身を持すること謹嚴、謙讓にして温厚——徹せる下座の行者であつた。

粗衣、粗食——晩年まで、綿服の一點張りを通し、自家製の木綿着に、床しい人格の閃きを見る——

天はこの奮闘兒に、幸運の時代と、地の理とを與へた。

彼のたくまざる先見は的中し、無名の一寒村は、全國的重輕工業の勃興に伴ひ
筑豊炭田の咽喉部として、一舉、石炭の一大集散地と化し、船舶の出入日に股賑
を極めるに至る——

瀬戸の海を出で、——遙々渡來し、創業の地と定め、商野開拓の第一頁を若松

に選びしこそ、卓見にして又神助であつた。

村制から、町制へ移り、年々人口の増加を來し業勢も町の膨張に正比例する。
只、十年一日の如く、否二十年一日の如く變らぬものは、先代善藏翁の働き振
りであつた、重き荷を車に積み、又は背に負つて、貴き汗の日の連続であつた。

この頃から、扱ひ商品の擴充を計り、目新しき品々を仕入るべく、京都、大阪
方面の間屋と取引を開始し、年に、一、二回位上阪することになつた。

何品はこの間屋で仕入れたらよいか、
同じ品でも、どこが安いのか、
曰く、口錢率、曰く販賣方法——

彼は人知れぬ、苦心に泣く思ひをしたものである。今と違つて、その頃の同業
者は皆狭量であつた、尋ねても漏してくれない。

苦慮慘憺、自ら研究し、自ら學ぶのであつた、この新生面開拓に依つて、彼の

生命あるもの

商賣にも一段の生彩が加へられた、華客の満足も豫想外であつた。

×

星霜幾變轉——

年は暮れ、歳は明ける——三年、五年、十年は夢の内に過ぎた。

國運を賭して戦ひ、そして勝つた、日清日露の兩役の財界に及ぼせし波亂、怒濤に、商界の盛衰興亡甚しく、慌しい世の動きではあつた。

その峻坂を越えて、彼の業礎は漸く固きを加へて來たのである。

日露戦勝の好景氣もやがて落ちつかんとする、明治四十二年の春——若き嗣子

現店主を郷里より呼び、参加せしめるに到る——

他日の後繼者は、來着の日から、荷車の後押しを命ぜられた。

獅子は愛兒を、斷崖より蹴落して、育てると聞く——

先代店主の胸中も、まさしく、それであつた、働きの貴さと、汗の眞髓を、自

ら味得せしめ、身を以て學ばしめたのである。

少年らしい、一切の空想を放擲して、父の許に沈黙の勤勞と、孜々の粉骨を惜しまなかつた、後繼者の大孝も異とせねばならぬ。

宜なるかな——

この事實が、後年、丸柏の發展に如何に役立ち、如何に光輝を添へたるかは、何人も認むる處である。

眞に店祖の衣鉢を繼承し、隆々今日に及べる所以も、又茲に存することを特筆せねばならぬ。

かくて、若き店嗣は、荷を背負ひ、車を牽き、或は父に隨ひ、或は單獨行商に力行の日を送迎するのであつた。

生命だにあらば、路傍に落下せる一粒の種も、やがて發芽の日は惠れるである。まして、いのちあり、暖き土の懷ろに抱かれたる健全の實——

生命あるもの

天日を仰ぐ日の来るべきは必然である。

二葉の用意は完全に調つた。

地中の営みは目に見えねど、其辛苦は、地上のそれに數倍する。

機運は遂に熟した。

急がず、焦らず、其日は訪れた。

神の愛撫！

彼はかく信ぜざるを得ない。

思へば長い地下の努めであつた。

×

明治四十三年八月五日！

記念すべき新店舗開設の日である。

實に、立志二十有二年目の盛夏——

あゝ、初代店主の感慨や如何。

×

然れども——

未だ貧弱なる、双葉に過ぎなかつた。

時に、先代店主四十四歳、現店主十七才。

三伏の候、烈日の下——

永年の熱望を達し得た、父子は、激悦の情抑ふべくもなかつた。

微なりと雖、一舗の主として、淋漓たる流汗を拂ひつゝ、酷暑の店頭に新生活

が初められたのである。

伸びゆく双葉

伸びゆく双葉

開店より財界ベニツクまで
— 明治四十三年—大正九年—

明治四十三年八月五日

若松の中川通に小さい店が出来た。

④、柏原太物店と云ふ——(カを後年④と改む)

田舎式の紺のれんに、マークを染め出し、看板だけは新しいのが掲げられた。まことに微々たる存在である。

店主一人、店員一人(嗣子)——総員二名の商店である、文字通りの二葉であつた。

今の目貫街も、當時は整はぬ、港町の場末であり、雑然たる通りである——

中川通と、三内町三丁目との角、東南に向いて、十坪程の店——木綿専門店にふさわしい構へである。

獨特の手織木綿を中心に、晒と紅木綿、捺染と紺緋——それに少し位、京阪仕入の流行瓦斯物を加えられた程度——これが販賣商品の全部であつた。

而し、二十餘年の経験と、背景とを基礎として起てる限り、貧弱なれど、自信はあつた。

店を出しても、二名だけでは、どうすることも出来ぬ、忙しい割合に能率ほ擧がらない、増員の必要を痛感するのであつた。

この翌年、明治大帝の崩御あり、哀しき諒闇の裡に、年號も明治から大正と變つた。

この年の八月、郷里より少年店員一名採用することになつた。

越えて——大正二年の十月、又々一名の増員があつた。

人員が増せば心も躍る——勇しく全力を傾注して販賣に専念するのであつた。

先代店主の奮進振りは、開店後も、毫末の弛緩を來さない、全く畏敬すべき働

伸びゆく双葉

きの權化である。

地味な經營——に独自の歩みを進め、時流に超然として、常に『石橋を叩いて渡る』主義であつた。

日夜、繁忙を極めて、店運は向上の一線を走る。

而し、日々の成績は、實に僅少——二十年後の今日に對比して録するに忍びぬ底の數字であり、轉た今昔の感に耐えぬ——洵に可憐なる双葉時代ではあつた。

多年の得意——を地磐として、全員の眞劍なる活動は開始され、顧客層は、綿布中心階級にも拘らず、逐次成績は上昇の一路を辿るのであつた。

x

大正三年四月一日——

待望の市制施行を見るに至り、俄然各方面に活氣を呈し、中川通の地域は益々重要性を帯びると共に、黎明柏原の前途に多幸を約束されたと云へる。

多惠多望の幸先に、勇躍を禁じ得なかつた。

この年——あの大規模な世界大戦勃發するや、同時に日獨開戦の報到り、世は擧げて、騒亂の渦中に投ぜられたのである。

大正四年、御大典の儀行はせられてより、歐洲大戦の餘波と、對獨戦勝の好調に乗つて財界好轉、目覺しく、漸次活況を極むるに至る。——

小さくとも、店舗を持てば、自然、新商品も充加せねばならぬ。

手不足だからとて、通信注文と、出張員への依頼だけでは濟まされない。

先代店主は、仕入に萬全を期せねばならなかつた。

多年製織に力を注いだ自家製手織縞も、開店と前後して、機場を閉鎖し、店に全力を傾倒するに至つたのも、只管一兎を逐はんが爲であつた。

大正五年四月——店祖の二男（瀆）も呼び寄せ入店せしめた。

その次の年の三月——同じく郷里より一名の入店者があつた。

店史四十八年

伸びゆく双葉

かくして總員六名の商店となつた譯である。

店主を除いては、みな年少の人達の集いであり、麗はしい、家族生活そのものであつた。

x

その頃、若主人（現店主）は、販賣の中心者であつた、老店主の仕入上阪中は無論、店の責任者であり、時折は單獨で京阪の仕入に上ることもある——

温厚致密なる性格は、よく父を扶け、後進を益し、好固の後繼者であつた。

x

大正六年の夏——老店母、婚嫁以來、實に二十有七年目、初めて、若松の店を來訪せらる、三女、不比子氏同伴であつた、夢ならぬ現實として、信ずる良人の築ける店を觀、殆んど半生涯を遠隔の故山より捧げ盡せる己が店を今眼前に眺め得た、老店母の胸中を察するもの果して幾人ぞ、店にとりては、何ものにも増し

た喜びであり、珍しい事であつた。

x

大正七年十月——店嗣（現店主）に良配決定し舉式さる、未來の店母たる新婦は、郷里の隣村、大濱なる麓家の長女——スガノ氏である。

丸柏の業礎に牢固を加へる慶事であつた。

店祖の二女、いつき氏の來援もこの前後であり、長女みゆき氏が代つて應援されたのも、この頃であつた、吾が兒の悉くを、勤勞を通して教育せる店祖の達見には、自ら頭の下るを覺ゆる。

x

大正七、八年頃は全く、大戦景氣に煽られて、財界未曾有の活潑を呈し、殆んど狂的狀態を現出するに到つた。

市勢興伸の途上にある、若松も、勿論その爐中にあつた。

店史四十八年

伸びゆく双葉

雨後の筍の如く、簇生點在せる市内の同商各店は、好機逸すべからずとなし、血眼の活躍振りである。

齋藤、園山、毛利、村上、大庭の巨豪を初めとし、中村、水野、北村、石飛、宮等の同業商店に、新進氣鋭の澤田を交へ、混戦亂舞——眞に火華散る壯觀である。

この喧噪裡にあつて、黙々、舊慣に座し、ひそかに潛勢力を養ひつゝありし、「柏原の」存在こそ、一種の奇觀であつた。

時代の動き、世の風潮を洞察するの明なき無能者として、輕侮視する同業もあつた。

無理からぬことである——

徒らに時流を逐はず、着實と、正廉と、親切と、熱誠とを、徹頭徹尾——信奉實踐する先代店主の態度は、時に、若き店員達をして、懷疑せしめる事さへあつた。

た。

同じことなら、堂々と、華やかに——縦横の手腕を振りたいと焦慮するのは、青年の通有性である。

客の求めに順應し、扱ひ商品の品目増加は著しく、少數の絹布、モスリン等の販賣を見るに到りては、年少店員の血氣、制すべくもあらず——大いに華々しく躍進すべきを老店主へ、再三建言したものである。

而し、答は、いつも簡單であつた。

『……まあ——羨やむことはない——辛抱するがいゝ……時が來れば解るものだよ——』

懇々——地味堅實の大道を説いて、不動の信念に莞爾たりしあの溫容——
今も彷彿として、眸裡を往來する。

組合聯合賣出しの外、絶對に所謂宣傳をなさず、人から人へ——客から客へ——

店史四十八年

伸びゆく双葉

の單一方針を金科玉條とし「賣出し屋」ならぬことを一種の誇りと信じてゐた程である。

學ぶべきは、内に包藏するこの精神である。

世は擧げて、宣傳萬能時代の觀あるも、實質の伴はざる、空宣、虚傳の勝利すべき日は來らぬであらう。

回顧して、再思三考を促さるべき問題である。

大正八年五月——一名の新店員が入つた。

x

財界の好調も、大正八年を絶頂とし、越えて、九年——あの大バニツクの來襲あり、豫告なき、青天の霹靂に、業界の倒産、相繼ぎ、目も當てられぬ慘狀を呈した。

若松市に於ける呉服、太物、關係業者の打撃も、無論甚大であつた。

全く、槿花一朝の夢——

相場激變！ 急轉直下の大暴落に、各店共手持品の大損害はどうする術もなく只、呆然拱手の有様である。

昨日の覇者は、今日の敗者——

得意の頂上から——失意のどん底へ——

天譴の苦盃は嘗むべく餘りに辛かつた。

しかし——

その世情を外に、何の躊躇もなく、逡巡もなく、吾等の「柏原」には、凜然として起ち上る用意があつた。

疾風の如く、率先して、在庫品の英斷の見切一掃を敢行し、續いて、値下り利口品の大量仕入を決行——

間髪を容れぬ、追撃的善處は、事毎に成功を收め、一舉にして、暴落の痛手を

店史四十八年

伸びゆく双葉

補ひ、尙綽々たる、餘裕を示して、市内の群雄商店を、アツ——と云はせたものである。

この時——

初めて老店主の先見と、卓察が、幾分か、若き熱血店員達を、領かしめ、経験なき華々しさの危険を十分認識したのであつた。

大動亂の颶風一過後——店勢は、愈々順調であつた。

諸種の絹布類も、毛織物も、漸次追加されて、面目は次第に一新する。

時代は移る——

「太物」から「呉服」へ……轉向の兆は明確の経路を辿るのであつた。

家主、藤井氏の諒解成り、三内町側の隣家を一戸合併し、擴張されたのもこの當時である。

然るに——

焦土の更生

類焼より復興まで
——大正九年——大正十一年——

不慮の嵐——

それは伸びゆく双葉へのよき試練であつた。

忘れ得ぬ災禍の日。

大正九年九月二十日——

若松市空前の大火は、一夜にして、繁華の中心地。本町六丁目及三内町三丁目の大半とその近接區域を灰燼に歸し、一望の焦土と化し去つた。

店史四十八年

深更一時より七時まで火焰は猛威をふるひ、小倉管下の軍隊の出動を見しほどである。

全焼百五十戸と聞くだけでも惨憺を禁じ得ない——

この時、店も、不幸にして、惨災の渦中に捲き込まれ、あはれ類焼全滅の悲運に遭遇したのである。

しかも——

折悪しく。老店主は、轉地静養中にて不在——若主人も仕入の爲上阪中であつた。

出火！ 延焼！ 絶望！

留守居の店員四名は覺悟を決めた、刻々迫る危険を冒して、先づ珍らしく郷里より来店中の老店母を避難所に托し、次に店内の整理に着手したのである。

怖れず、騒がず、萬全を期して、周到の用意をなし、焦眉の急に達するや、外

部よりの救援と呼應して、一気に、中川通を隔てし園田氏宅へ荷物を投入した。最後に、戸棚類を運び出す頃は、焰煙朦々如何ともなし難き危窮の状態であつた。

かくして、遂に階上の商品及家財は、空しく炎上にゆだねざるを得なかつたのである。

しかし——

あの急場に直面し、機宜の處置を誤らず、猛火の中に、辛じて商品の大半と、重要書類及び、若干の備品とを安全地帯へ搬出し得たことは、せめてもの慰めであり、不幸中の幸であつた。

勿論、一般懇意先の絶大なる援助、消防當局の盡力に對し、満腔の謝意を忘れてはならぬ。

而し乍ら——

努力三十年の結晶を一瞬にして烏有に葬り去らんとする危機に臨み、よく若輩四名の微力を以て、全焼の被害をあの程度に喰ひ止め得たことは、まさしく、天神助の然らしむる處である。

天を仰いで感謝する彼等、店員の双眸には涙があつた。

「カジ ミセニヒガ ツイタ」

全市暗黒の中から悲報は飛んだ。

急電に接し、翌日愴惶として歸若せし店主父子——郷里からも二、三の來着者があつた。

一同、餘燼なほ熄まぬ、焼跡に立ちて、何を想ひ、何を感じたであろう。

見よ！ 慘憺たる、暴威の址、一望の廢墟である。

悔ひて歸らぬ現實であつた。

心の平靜に復するや、話題は、善後の處置に及んだ。

火災保険は——？？

誰もの第一に考ふべき事からである。

然るに、何等の不運ぞ！ 保險會社との契約は全然ない實狀にあつた。

保險金は——

明らかに皆無である。

この事實、は全員に異常の衝撃を與へると同時に、悲壯の決意を胸底に銘せしめ、敢然として奮起する導因であつた。

不慮の嵐に、危く奪ひ去られんとせし、可憐の双葉を抱きとめて、更生への誓ひは固つた。

罹災直後は、濱ノ町、弓場氏の芳情に甘へ、その宅に避難し、間もなく——福田善太郎氏の義侠的好意に依り、東新町に一戸を借り。九月二十九日——移轉假住することゝなつた。

焦土の更生

事態の急變は、人心に極度の緊張を來らしめ、復興への努力は全く超人的であつた。

不眠不休の幾日か、續き、地主藤井氏の厚情に依り、假營業所急造の運びとなつた。

場所は、舊店舗跡より西へ一丁、三内町三丁目の中央である、大工その他の工事は即刻郷里より來援し、晝夜兼行——バラック平家建、四十坪の假營業所は超スピード一週日で完成した。

十月十日——

罹災二旬にして移轉復舊をなし得たのである、バラックの假家なれど、木の香新しく、焼野が原に一軒だけ「吾等の店」が出現し、あたりを睥睨した當時は只譯もなく嬉しかつた。

十五日、十六日、十七日——

「焼殘品大賣出し」の當日である。

移轉するや、直ちに諸種の準備を整へ、漸く蓋をあけるに到つた。

流石に連日活況を呈し、豫想外の盛觀であつた。

復興未しの見わたす焼土に、押し寄せる人の波、屋臺店も出る、時ならぬ大賑ひで満員札止に店内混亂を極め、床板落下して、大騒ぎを演ずるなど、焼殘品大賣出しらしい珍風景を點出した。

賣出し宣傳として、町廻りをしたのも、チラシ廣告を印刷したのも、この時を以て嚆矢とする、無論賣上成績に於ても開店以來の新記録であつた。

かくて——

苦難の焦土に、再生復興の、意氣は燃え上つた。

不屈の精神にこそ、祝福は與へられる。

轉禍爲福は不撓の精進に依つてのみ、完成せられるのであつた。

店史四十八年

涙組ましき、全員の一致團結は、翕然たる全市の同情と相俟つて、不便なる、假營業所にも拘らず、舊に増すの繁忙を招來した。

×

バラツクの店に、年を送り、希望に輝やく大正十年の春を迎えた。

三月九日——

中川通に面する舊店舗隣接の二戸（焼け残りし家）を借り、名ばかりのさゝやかなる分店を設け、モスリン部を移した、店員二名を置き、本店との聯絡案内所が本來の目的であつたが、相當の成果を擧げてゐた。

この春に、二名、秋に又一名の新入店員が参加し、益々優勢になつてゆく——分店は、臨時設置に過ぎない爲、家主の都合もあり、この年の末、閉鎖し、本店に併合したのである。

新店舗本建築は行惱みのまゝ、歳は暮れ、そして、明けた。

わが所有地ならぬかなしさは、どうすることも出来ぬ。

諸種の問題で、幾度かの折衝と、一年有半の期間を費して、漸く今夏新築の決定を見たのである。

待望の新店舗は舊店舗跡に、家主藤井氏の手で着工され、初夏の交、遂に竣成を見る——

大正十一年六月十五日、久しい雌伏の假營業所から本店舗へ——喜びの移轉復歸である。

新しい門出であり、復興躍進の曙であつた。

木造二階建、中川通側五間、三内町側六間、以前よりはやゝ擴張されたのである。

ショーウィンドも一個設置し、面目は一新され、再興柏原の熱意は、全店に横溢してゐた。

焦土の更生

相變らぬ座賣式に、つり裂は益々豊富主義を執るのであつた。全店舗に躍動する新鮮味は、一種の魅力となり、迫力となつた。而して――

この機を逸せず、數年來の熱望を、一舉にして、達成すべきである。

その宿望とは――

曰く、太物から呉服へ――の轉身である。

内容充實の具體化であつた。

最早、手織木綿時代は去つて、モスリン、絹布、中心時代への一般的趨勢はど
うすることも出来ぬ。

太物から呉服へ――

滔々たるこの動きに乗つて、仕入方針に一エボックを劃すると共に、經營の全
般に亘り、根本的の一大刷新を斷行すべく、衆議は一決した。

その第一着手として、店名表示の改稱を行つたのである。「太物店」の名は、
祝融子の見舞へるを最後とし、

新装の店頭高く「柏原呉服店」の看板は掲げられて、復興の前途を飾るにふさ
わしかつた。

かくして――

内容外觀ともに、新生の店として、その第一聲を放つに至つた。

七月三日より四日間――移轉復興大賣出しを盛大に開催した。

俄然人氣は沸騰し、すばらしい成果を収めて、再生のスタートは明朗であつた
平素は純座賣式とし、特殊催しの場合に限り、店内總陳列販賣を創始したのもこの
時である。

新舗狹隘なる爲、バラツクの假營業所跡はそのまゝ、綿倉庫として利用し、愈
々全面的に、大活躍の覺悟は決つた。

百年の大計

災厄に依る、愁眉は、あとかたもなく晴れて、烈日の下、若駒は嘶く――

×

陣容は整ひ、組織は強化し、今や、焦土の更生、全く成るに及ぶ――
白陽を脚下に浴びて、猪突、前進する「若き柏原」の英姿は、げにも颯爽たる
驕士の觀があつた――。

百年の大計

掛賣全廢前後

――大正十一年―大正十二年――

災後の新方針に基き、愈々本格的進出を企圖するに先立ち、將來への重大なる
禍根とも云ふべき、論件が等閑に附されてあつた。
それは、掛賣制の行詰りである。

月賦にも等しき資金の固定――

貸倒れに依る損失の問題、等、多年の懸案たりし、掛賣全廢の斷行は、急務中
の急務であつた。

逡巡の要は更になかつた。

眞に、未來への大を、試みんとならば、この際、或程度の犠牲を忍んでも、機
先を制すべきである。

而し――

いざとなれば、しかく簡單には行かぬ事情もあつた。

言はず語らず、小賣業界の積弊として、貸倒れの苦汁は、各店とも舐め來れる
處――

然れども如何せん、華客との密接なる關係上、甲乙を附して、精選することさ
へ不可能とされた。

店史四十八年

殊に、不良得意に限り、帳付けを断れば、今までの分の支拂拒否に依り、損失過大は火を見るよりも明らかである。

況して、他の掛貸本意、外商専門店に於ては、現金制の敢行こそ、夢想的暴舉とされ、致命的劣策として、一笑に附されたものである。

さればこそ――

地味の中に、進取の氣風を持つ、吾等の店に於てさへ、幾回となく討議され、研究され乍ら、荏苒、今日まで決定を見ざる次第であつた。

論ずるまでもなく、仕入、販賣の現金制は、安く仕入、安く賣る、唯一の方法である。

貸賣制は眞面目に、正直に、支拂ふ華客へ、貸倒れ分の轉嫁負擔を強ふる、不合理なる惡制である。

只――

この擧を執行するに當り、尤も困難と思惟され、憂慮される點は、不良華客を一掃すると同時に、優良華客も共に、一時的にもせよ、失ふからであつた。

老店主の裁決に躊躇の色見えしも當然である。

良かれ、悪しかれ、十年、二十年、或は三十年の久しきに亘り、親しい華客として、聲援し、支持して頂いた方々へ、一片の「店則改正」を理由とし、「帳付御断り」の通告は、餘りにも無暴であり非禮である。

殊に、第一級、第二級に屬する有力の先様では、或は激怒せられ、或は憫笑されて、一朝全得意の喪失されるであらうことは、自明の理であつた。

さり乍ら――

現状のまゝ、推移せんか、

それこそ、將來由々しき暗礁となり、禍因であることは、何人も首肯し得らるゝ程、事態は急迫を告げてゐる――

貸賣本意に依る、資本の固着と、回收の不振とは、因果法則的に、仕入の不如意と、正札の賣價漸騰とを餘儀なくせられ、結極に於て、建業の精神に背反し、理想の前途に、暗影を投ずるもの——

熱血急進派の店員達が、即時斷行を、懇請したのにも、十二分の論據と、確信があつた。

加ふるに、先年來打續く、暴落の痛手と、火災の創痍とは、顧客の同情に絶る絶好の機會でもあつた。

詮ずれば、只「斷」の一字あるのみ——

x

老店主は、流石に、不安の面持で幾夜かの熟慮を額の皺に刻み——
靜かに最後の斷定を漏らされた。

『——どうも……心配ではあるが——お前達さへ、その決心で責任を持つ覺悟

があるなら——とにかく、全廢に決めるとしよう——……』
そして——

『——或程度の犠牲は……止むを得まい——』と結ばれた
既に——

老境を示す、口邊には微笑を浮べ、語韻には力が籠つてゐた。

事、遂に決す——

宿年の題案はかくして、實施の運びに至り、百年の大計、茲に確立を見る。

この問題の急尖鋒達は、老店主の信頼に對し、背かざらんことを心に誓つた。

——それから、幾許もなく、それ〴〵現金制の實行に着手し、邁進したのである。

貸賣先の全部に涉り、店則改正の發表と、貸賣全廢の趣旨徹底に大童であつた
一部の有力なる、第一、二級先へ對しては、本當に血の出る思ひの願ひである。

尤も當時の華客は大半が何と云つても、店の生立から見て、綿布中心層であつた。

「洵に、申上兼ねますが、今回、店則改正と共に、従來の制度を改め、徹底的に安く賣らせて頂きます爲に、仕入を全部現金制とし、同時に、買つて頂く方も、帳付け制度を廢して、御不便でせうが、即金に御願ひ申すことになりましたから、何卒よろしくお依頼申上ます。

決して、お宅様の信用云々でなく、今度はどちら様も全部、御無理申上げてゐるのでございます。

御承知の通り、先年來の暴落と、類焼を契機と致しまして、種々考慮の結果、全面的の一大刷新を行ひ、本當の意味に於て、皆様へ、純正奉仕させて頂く、微衷に外ならぬのであります。

恐れ入りますが、御同情に依りまして、今までに増し、御引立の程を、特に御

願ひ申上ます——」

厚顔しく、虫のよい、申出で、あるだけ、反響は、賛否、區々——かなりの難業であつた。

無論、その位のこととは覺悟の前であり、ひるむ者はゐなかつた。

サービスにもベストを盡し、懇切に、誠意を吐露して御願ひするのである。

到底、一朝一夕の業ではない、改新は至難であつた。

而し——

久しきに亘る、舊慣を打破革正せんとする者の熱意と眞劍とは、日を逐つて、一般の理解を深め、趣旨の徹底促進を來し、成業の曙光は認めらるゝに至つた。一部の回收不能に依る損害×××圓は革新途上に於ける止むを得ぬ犠牲である。

店則改正以來、半歳——一年……

遂に一切が杞憂であつたと悦び合ふまでに漕ぎつけた。

賣上の數字にも、何等顯著なる影響を來さず、さしもの、決死的難關を突破し得たことは、一つに、全員の協力に依る——

この試みが、動因となり、却つて、新局面は拓け、顧客層の擴大を招き、一石二鳥の効果を擧ぐるに到つた。

×

『……心配ではあつたが——あの時、掛賣全廢の斷行をしてゐてよかつた——本當によかつたと思ふよ——』

後年、店祖善藏翁が、心からなる感懷であつた。

かくして——

店の前途は、耀々たる光明に照され、山なす波濤を、幾度か乗り切ることが出來た。

隠されたる、試練は、まだく襲來するであろう。

しかし

金鐵の如く、赤銅の如く、錬磨の機會ある毎に、身を持つて當るの度胸は出來た。

日に増す、商品の充溢は、やがて階上の使用となり、發展、又膨脹——

一流戦線への肉迫は目覺しい。

同業者も無關心ではゐられなくなつた。

斯界の彗星的存在として、重きをなすにつれ、全員の責任も又大ならんとする——

大正十二年の春——一名の新店員が參加し、總員十名となつた。

最小の人員を以て、最大の能率を擧げ得た時代である。

進展の一路

吳服商組合脱退とその前後
——大正十二年—大正十四年——

經營の全般に及ぶ、面目の刷新は「柏原吳服店」の名聲をして、加速度的に、宣揚せしめるのであつた。

随つて——

扱ひ商品は多角化し、販賣戦線は、擴大され、破竹の勢を以て、既成の老大商店に肉迫する——

年々、新入店者相繼ぎ、若人の意氣、冲天の概があつた。

惠まれたる、地の理と、人の和は、何ものにも、換へ難き、店の寶である。

次々に——

参加する青少年は、悉く、店主と同郷の者、縁あつて、この事業に參與する光榮を自覺し、一視同仁の店風に感謝せざる者なく、慈父の溫翼に、雛鳥の如く抱

かれて、すく／＼と成長する姿——頼もしくも、美しき一幅の畫題である。

殊に——

起床から閉店まで、繁激の店務に精勵し、深更の寸蔭、早曉の一瞬を惜んでは讀書に勉學に、各自、向上への精進を怠らざりし若き人々——

他日、この店が大成して、理想線上を、ゆき得るの日あらんか——

その時こそ當然、功の一部を割いて、當時の白熱的緊張の賜に、歸すべきである。

かゝる——

内外の情勢は、期せずして、京阪、並に、各産地に反映し、現金仕入方針の偉力と相俟つて、信望昔日の比にあらず、各會社、各問屋とも、競つて、出精割込みに狂奔し、有利なる立場を一層助長するの幸運は見舞ふのであつた。

仕入部は、今や若主人の檜舞臺であり、多年の經驗を緯とし、獨自の手腕を經

店史四十八年

として、恰も、無人の境を行くに等しい——

過る災厄の年を轉機として、老店主の所謂、健實守成の根本信條に、新銳積極の生彩を盛り、更生「柏原」の特異性を發揮するに到る——

諸種の設備、宣傳方法に、新機軸を加味するなど、明らかに、その證左である。

大正十三年——

又々擴張の必要に迫られ、止むなく、三内町側向ひの、眞鍋氏所有、家屋二戸分を借入れ、豫備商品の置場並に居間として使用するに決した。

限りなき發展は、到底かゝる一時的糊塗策を以て補足すべくもない——

しかし——

正しき必要品は、必ず必要なる時、自然に與へられる——

この信に立脚せる老店主は、満足であつた。

「無理せぬ様に——」

それは、善藏翁の、平凡な、そして徹底せる處世の信念である。

常に 順天のこゝろを心として、終始する者には、毫末の不安もない——

老店主の、一言一句は悉く、未成の人達を益する、活ける教示であつた。

x

大正十四年——

この年——

珍らしい事件が持ち上つた「柏原」の發展が生んだ、喜劇である、老店主の不在中であつた。

時は秋——

或る夕方であつた。

店では、賣出し準備の眞最中であつた。

吳服商組合長の名で達示が届けられた。

「一寸談じたきこと有之候に付、本町の某店まで、速刻出頭相成度候——」
とあつた。

何事かと、直ちに、若主人は、仰せの通り頭を出したのである。

處が——

組合の幹部、某々氏等數名列座の下に、

「——お店には、近く賣出し開催の御様子らしいですが……來月×日から、組合の聯合賣出しがあることに決定して居りますから中止して貰ひたいと思つておいでを願つた譯です、もとく、例年來月×日頃には組合の賣出しがある位のことには御承知の筈です、それにも拘らず、組合の許しもなく、僅々數日前に個人賣出しをなさるとは、不都合だと思ひます、組合の名に於て、御中止を勸告致します——」

理路整然——なる程、仰せは明瞭であり、又、御尤である。

しかし——

當時、組合には、かゝる際に於ける何等の規約もなかつた、殊に、往年この問題に關する意見を、柏原案として組合に提議したことがある、其時——今詰問せらるゝ諸氏は、お互に束縛をうけるからとの理由で、規約設定を一蹴された人々ではないか、

而して、その後、幾年——各自隨意に、組合賣出しの前後、勝手氣儘に、個人賣出しを平然としてゐた方々であるだけ、一層の興味がある。

「——さうでしたか——しかし、困りましたね、實はもう——一切の準備も整ひ、宣傳物も印刷に廻してゐるものですから——今更中止と云ふ譯にはなり兼ねると思ひますが、一應、全員に諮つて見ることに致しませう——しばらくお待ち下さい——」

温厚な、若主人は、やさしい應答をするのであつた。

「——何と云つても、組合を無視した行動を敢へてなされるとすれば、吾々にも考へがある——」

老獯さうな或幹部は、威猛高に、かう言つた、羊に對する狼の態度である、若主人は、徐ろに、又曰く、

「——では一寸、伺ひますが、聯合賣出し前後、何日以内は、個人賣出しを禁ずと云ふ規約は、いつから出来てゐたのでせうか、私共としても、規約違反など、絶対にせぬ心算で居りますから——」

この間に、諸公の顔面から、一種の難色があり／＼と讀まれた。

もと／＼狹量なるエゴイストの一幹部が策謀であり、不純なる横車に過ぎない「——いや、そんな、規約は無いが——要するに、徳義上の問題です、信義を重んぜらるゝお店に——その位のことは——」と、

理由はかくの通りであつた、苦しい申開きである、皮肉をこめた云ひ振りでもある。

事の重大性に、若主人の通知に接し、店から、二名の店員代表が乗り出した、血氣旺盛の若僧である。

純理と、準備完了の故を楯に、断じて中止は出来ぬと主張し、老幹部連を睦若たらしめた。

横暴、専断なる組合強權の彈壓には敢然として、應戰するの決意を示し、若き柏原の爲に、萬丈の氣を吐いたものである。

青二才と見くびつてか、卓を叩き、口角、泡を飛ばして、賣出し中止を迫るすさまじき老輩もあつた。

長時間に涉りての折衝も空しく、組合長の辭職問題までこぢれ、紛糾に紛糾を重ねたる結果、心ある幹部某氏の陳謝と、平和的なる若主人の英雄的讓歩とで、

遂に事は落着を告げるに到つた。

「——吳服商組合圓滿の爲に——莫大なる犠牲を忍んで、賣出しは中止致しま

す、どうぞ、私共の微衷を活かして、今後の御盡力を願ひます——」

涙を呑んで、引き上げたのは、深更二時であつた。

形勢や如何にと、全店員は、待機のまゝ、寢ずにゐたのである。

若き人々は、この時初めて、讓歩の愉悅、負けたる者の快感を、つくづく學び

得たのである、嬉しい満ち足りた氣持ちであつた。

それと同時に、あの、老幹部諸氏が、氣の毒に見えて仕方がなかつた。

x

不運にして、この事件後、幾許もなく、當時の責任者とも目さるべき、某有力

店に於て、故意か、不用意か、組合聯合賣出し直前、數日以内に、個人賣出しの

催しがあつた。

然るに、どうした譯か、組合より何の異議もなく、黙認されたまゝで濟んだ。

何と云ふ念の入つた、片手落であらう。

この事に端を發し、遂に組合の一員を潔く辭し、堂々、組合脱退を執行するに到つた。

十對一——名譽の孤立である。

喜劇は、こんな結末を告げて幕が下りた。

x

かゝる内にも、吳服店としての形態は、益々完備し、他店の感ずる脅威は、想像以上であるらしい——

脱退はしても、平和を重んじ、協調を旨として、少しの隔離も感じなかつた。

脱退後は、出所進退が自由であり、組合を向ふに廻しての張合ひもあつて、事に毎に痛快である。

劃期的飛躍

實業團員としての立場には、異變なく、何の支障も不便もない——
その後——數回に涉り、某々有力者から、組合復歸に就て、懇請、慫慂もあつたが、事情を述べて、厚意のみうけ、謝絶した。

×
——組合脱退は、全員の緊張に一段の鞏固を添へ、進展の一路は旦々として無限である。

劃期的飛躍

新築轉移擴張事情
——大正十四年——昭和二年——

この店に——幾許の力が附與されてあるか知らない。
一握に足らぬ小資から出發して、何の澁滞もなく、自然の導きに從つて、こゝ

まで運ばれて來た。

無論、表面的迂餘はあつた、曲折もあつた、重疊の峻坂を越えて、今日を迎へたのである。

しかし——

内面的には、不動と靜安のそれであつた。

奇蹟だとも云へる——幸運だとも、評し得るであらう。

この店は——

生れ乍らにして、皮相からのみ斷ずることの出來ぬ、内在の生命があつた。

聖なる、働きを通して、人物の養成と、國家への忠誠とが、ねらひであつた。

停止なき、成長の泉は、地底深き處にこそ潜在する——

飛躍の根底は、語る能はず、示し能はぬ、生命の内に胚胎する。

このいのち——

店史四十八年

劇期的飛躍

店祖の衣鉢を眞に把握して、吾等は夢寐にも、忘れざらんことを、心せねばならぬ。

× 組合を脱退した——

局面は一變する、世の推移は慌しい。

十年の昔——

老店主の漏らされたる豫言は、事實となつて、今目前に生々しい。

財界好況の波に乗つて、花火的成功に陶醉した店々は、流れに浮ぶ泡沫にも似て、或は閉鎖し、或は悲境に喘いでゐる。

「——羨むことはない——今に、解る時が来るよ——……」

天の審判は、公平の筈である。

所謂「解る時」が餘りにも早く到来し、自ら省みて慄然たらざるを得ない。

尤も、財界の前途に見切をつけて、安逸の靜境に轉住された人達もあるにはあつた。

しかし、業勢不振が、その眞因であることに例外はない。

思へば——

若き柏原にとつて、こよなき他山の石である、覆轍の憾みなからんことを、念じつゝ、前進の用意が肝要である。

日に三度、内に省る心こそ、發展の秘鍵であり、躍進の前提ではあるまいか。

この年も——

不景氣の聲を外に、順況に浴しつゝ、成績累進の歳であつた。

この三月、三名の増員あり、來るべき日への準備に遺漏なき工作は續く——

× 昭和元年——

店史四十八店

劃期的飛躍

劃期的飛躍への一步手前である。

眞鍋氏の土地、家屋購入の交渉も開始された、世相に背いて、不況時にこの計劃は進められてゆく――

豪膽であり、英斷であつた。

年内には、何等の目鼻もつかず、折衝底迷のまゝ歳は暮れた。

舉國憂愁――

畏しこくも哀しき、

大正天皇の崩御あり、師走の風は冷酷、身を切る様であつた。

昭和二年――

丸柏の店史に、一大エボツクを劃せる、輝やかしい年は明けた。

持越しの重大懸案に就て、交渉全權にして、かくれたる相談役、下田氏は、眞鍋氏を訪れること數回――しかも話は一進一退、なか／＼意の如く運ばない。

かくして――

持久戦のまゝ、遼遠の覺悟を決めて、春を送り、夏に入つた。

其後――

下田氏の熱心と、盡力とは、遂に効を奏し、急轉直下、兩者の一致點に達したる爲め、漸く、受渡しの議が成立した。

六月十三日――

完全に調印がすんで、ほつとした日である、中川通と、三内町に面し、地積八十六坪、若松一等の目貫場所として申分なき位置である。

買収土地は、建築間もなき家屋、五軒の建込みまゝであつた。

x

やがて――

新店舗建築の設計が出来た。

店史四十八年

おゝ——

吾等の所有地に、吾等の店舗が建つ！

全員の欣喜は、雀躍そのものであつた。

建築は郷里よりの義侠的應援を得て直ちに着工、一切を任せて、竣工を急がせる——

路を隔て、連日耳を打つ工事の騒音は、恰も凱歌を聴くのがあつた。

全く内外多事にして多忙の明暮が續く——

當時、現店主夫人スガノ氏は、郷里に於て、先代店母を扶け、病める老店主の看護に餘念なき状態であり、爲に、店舗建築中の炊事方面は、現店主舎弟濱氏夫人、智恵子氏の擔當であつた。

x

十月二十日——

秋空一碧、菊花薫る、清澄の日であつた。

吾等の新店舗は、見事に竣成し、新装の雄姿を、中川通の一角に現はしたのである。

見よ！

待望の新店舗——

輝く、四十年の歴史を秘めて、吾等の前に聳立する。

同じ日に、倉庫用地として、三内町側信用組合を隔て、近接する、宮野氏所有地四十坪購入の手續完了し、明朗頻りである。

x

十月二十五日——

借店舗より、自店舗へ……

舊店舗より新店舗へ——

店史四十八年

劃期的飛躍

久しい古巢を捨て、新しい住居に移る慶びの日である。堂々たる大店舗は設備も、構へも、全く舊舗の數倍である。喜びに躍る全員の顔――

移轉作業のかけ聲も、いと勇しく豪勢であつた。

たゞ――この日。

あの老店主の温容を、新店舗に、迎え能はざりしこそ、千秋の恨事であつた。病める身を、故山に静養されて幾月――

思へば、過去の一切が、今日の日の爲にてありたらんものを……。歡びの中に、一抹の寂しさはどうすることも出来なかつた。

X

移轉完了――

この日から、紀念賣出し準備の爲に、大董の奮闘が開始された。

新仕入の商品山積し、さしもの新店舗も、所せまき状態である。

京阪問屋の義侠的、祝意的、奉仕値に、店としても莫大なる自祝的犠牲を拂ひ實に空前の大奉仕敢行の豫定である、全員必死の活動に、前日の深更、漸く札入配置、陳列、裝飾等の整備を見るに到つた。

當日の陣容も又、未曾有に屬し、京阪問屋の應援十數名に、整理所、和裁部其他の加勢を加へ、總員百名を算するに及び、配備は臨時新編制に基いた。

階上、階下總陳列式とし、御買上品は、全部合札に依り預る事とした。當日は刻々と迫る。

宣傳も、遺憾なきを期し、町廻り、チラシ、辻看板、店頭裝飾等、萬全を盡した心算である。

眞に類例を破る盛舉であり、店運を賭しての壯舉であつた。劃期的飛躍の成否――店勢の興廢は、懸つて、この催しにある。

店史四十八年

劃期的飛躍

全員、満を持して當日を待った。

その前夜――

躍る心を押へて、靜かに明日の成功を、神かけ祈つたのである。

×

十月二十八日――

新築、擴張、移轉紀念大賣出しの第一日である。

夜は明けた。

開店の時刻は迫る――

早朝より押寄せて、時を待つ華客は、刻々數を増し、開店近き頃に至れば、店

頭を壓し、外路を閉さぎ、人、々、々――無慮數百、否、千をも超えるであろう

あの中川通が一時通行止の觀を呈し、警察當局の應援を仰ぎ、交通整理の任に當つて賃はねばならなかつた。

八時半――

開店された！

殺到する人、見物する人。

怒濤の如き人の波である。

盛觀眞に名狀すべからず――

階上も階下も、人又人、忽ち、満員札止の状態である。

各販賣部に於ても、飛ぶ、賣れる、投げる、奮戦混亂の極みであつた。

かくして――

終日、満員を續け、幾度かの札止めを行ひ、驚倒的成績裡に、この日の幕は閉じた。

×

十月二十九日――

店史四十八年

劃期的飛躍

前日に變らず、否より以上の活況を繰り返したのであつた。

x

十月三十日——

最終の日である、俄然柏原の投じたる爆弾的催しの波紋は、市内のみに止まらず、全北九州の服飾界に、一大ショックを興へ、遠近に、評判を呼び、この日も同様の匆忙裡に終つた。

x

連日の盛況は、眞に驚異であり、破天慌であつた、記念するにふさわしい成績である。

あの驚くべき數字が、電波に托されて、郷里なる、老店主の枕頭に届けられた時——夢ならぬ事實に、よくこそ……と、無量の喜びを漏らされたであらう。まこと、努力四十年の成果である。

老店主の宿痾、一日も早く癒えよと、念じつゝ、記念賣出しの好績を歡び合つた。

x

店にとつて——

まさしく、今日の催しは、店史に特筆大書さるべき、重要性をもつ、悠々四十年の歴巻であり、劃期的飛躍であつた。

店祖の長逝

店祖の長逝

— 昭和二年 —

人生の行路平坦ならず、店運の途上、又伏起をまぬかれぬ。

過ぐる年より、老店主の身體に異状あり。全員、殊の外なる心痛——

早日の快癒を祈るや、洵に切なるものがあつた、病勢は、時に軽く、時に重く醫師の診断も區々であつた。

この年（昭和二年）に入りて、愈々その大患なるを認められ百方手を盡すのであつたがなか／＼である。

無論絶對安靜を要し、排泄器官の故障なる爲め、攝食に最大の注意を拂はねばならぬ。

或は福岡の病院に、或は、岡山の病舎に、その道の大家、専門醫に依つて、最善を盡すのであつた。

食餌療法に依るの外なきを宣せられてより、郷里の宅に、靜養の心を定め、爾來幾月無味の療病生活に入られたのである。

家族は申すも更なり、親縁、知友——

その平癒を念じて、熱誠をさゝげるのであつた。

殊に、糟糠の老夫人が誠節は、人天の限りを致し、床しい語り草であつた。

夏は過ぎ秋に入る——

見渡す、故郷の山々は、なつかしい紅葉を織り、靜かなる詩境を呈した。

既に、天命を知る、老店主は、割合に平安であつた。

日と共に、細りゆく、自らの餘命、幾許ぞ、肉につける、我の、やがて亡び、

制縛なき魂の世界に生きる歡びと寂しさ——

天界を悠歩する心境である。

しかし——

店史四十八年

一度想ひを、九州の地、あの店舗の上に馳する時、病苦ならぬ、やるせなさに心のどよめきを禁ずることが出来なかつた。

しかも、

敷地を買つて目下建築中ではないか。

刻苦四十年、結晶の殿堂が、やがては、落成するであらう。

人生の大半を傾倒して、心血を注げる事業である。

今、漸く稔らんとするに、その結實を見ずして、何の生涯ぞ。

明し得ぬ、心残りは、これであつた。

×

十月に入つて、快報は頻に、思慕の若松より飛來する。

老店主は、病床に坐して、その書信を悦讀するのであつた。

竣工成る！ 移轉完了！

久しい病臥に疲れたる、顔面に、珍しく紅潮を來し、満足さうな微笑がこぼれる。

二十八日の夕――

朗況に湧き返る、新築移轉擴張紀念大賣出し成績の入電があつた。

「ヨソウガイノセイセキ、×××××ウレタ」

第一日の盛觀を、驚くべき數字に依つて、想像し、まだ見ぬ、新店舗に對して制し切れぬ、愛着を感じるのであつた。

それから、

老店主の血色はよくなり、見違へる程の元氣が出た。

一度、新しい店を觀て來たい、――

この思ひで、心が一杯になつた。

萬一、その爲に、壽命に影響があるとしても、本望である。

店史四十八年

店祖の長逝

歸心矢の如く、最後の思ひ出に――

さうした、願ひは、周囲の人々の不安を退けて、遂に下若の決行となつた。

記念賣出しも終了した十一月の五日、郷里を立つことになつた。

大患を冒しての旅行である、誰も胸に、もしや――の心配があつた。

随行は、夫人と他に縁者一名である。

出發の日――

心なしか、見送る人にも、送らるゝ人にも、言ひ知れぬ、寂愁があつた。

「――すぐ戻つて來ますよ――」

老店主は、わざと、朗かに、笑つて見せるのであつた。

しかし！ あゝ、しかし――

これが……

人の世の、最後の袂別であらうとは――

更に牢記すべきは、備後、尾道驛より乗車の際、若主人が篤志の手信を以て、是非二等車にすべく懇願せしにも拘らず、棧橋より驛までは徒歩、――汽車は、三等にて結構と云ひ随員の勸説も聞かざりし一事である。
「二等列車など、勿體ない――これで結構――」
と、思ひ出多い山陽線を、千里一瀉の想ひを乗せて、鐵路轟々、九州に向ふのであつた。

x

その夜――

長途の旅に異状もなく、なつかしき第二の故郷、若松に着いた。

或は、再び、見られぬかと思つた、新店舗を、夜の街に、仰いで、店祖は感慨

無量、萬懷交々、老ひの眼にも、熱いものが、溢れるのであつた。

人々に扶けられつゝ、店内一巡――

店史四十八年

店祖の長逝

柱を撫し、床を摩す、恰も、愛し兒に接するの欣びを見る。
頃日の宿望を達して、老店主の満悦や憶ふべし。

「——立派に出来た——これで本望じゃ——」
幼兒にも等しい温容に、病色は、見えぬ程であつた。
これで、——

老店主が、快癒されたならばと、全員は、只管、心に、神佛を念ずるのであつた。

翌日から、階上奥の四疊半が、病室にあてられ、療養の居間であつた。

×

この頃、三内町側近接地に、倉庫、兼、居間用の家屋、建築中であつた。

老店主は、數回、病中を押して、そこまで行き、模様を見ては樂しみ、工事員達を犒ふのであつた。

間もなく、竣成した時など、その祝宴を、自らの、枕邊近くに張らせて、喜びを共にされたのである。

かくして——

十一月も暮れ、十二月に入る頃は、病勢頓に、加はり、衰弱甚しく、愈々再び起つ能はざるを思はしめた。

時折枕頭を訪へば既に天命を感ずるもの、如く若き人々の爲に、醇々として、處世の大道を、説き、後來を誠しめられるのであつた。

耳底に残る、あの聲、あの詞は、今も、新しい響きをもつて、吾等の弛緩せんとする心を搏つ——

「……粗衣でよし、みんな、あるがまゝの眞裸で光る人間であつてくれよ、ね。うちのない者が、ダラ／＼した服装で、威張つて見た處で、心ある者は嗤つてゐる、心なき者だつてはなもしみかけてはくれないうよ、先づ、自分のねうちを

店祖の長逝

ごまかさぬことだ、見榮と、派手氣は身を亡す基だから、みんな氣をつけて、
れる様に——

幸ひ、今までは、みんな、よくしてくれた、有難いと思はぬ日はない、しかし
これからが大事じゃ……勝つて兜の緒を締めねばならぬ、俺も、はや長いこと
はあるまい、と思ふ、いつも口癖の様に云ふが、本當にお客様の爲を思ひ、値
段を安くして、心からの親切を盡すなら、着物を着る人が無くなるまでは、大
丈夫だ、みんな力を協せて、働く様に頼みますぞ——

病める人とは思へぬ程の底力が籠つてゐる、そして言葉は又續く——

「……誰でも、自惚れを持つてゐる、それが、いつとはなしに、傲慢に變る、
本當に反省する人はその時、氣がつくが、大低の人間は、氣がつかない、そし
て、周囲の平和を亂すことになる、それで、境遇にも、心の中にも、常に重石
が入る、やかましく云ひ、好きな事をさせぬ、むずかしい、怖ろしい立場の人

が必要だ——自由を束縛するとか、時代に暗い無理解な頑冥老爺だとか云はれ
たり、思はれたり、しても、それは止むを得ない、本當の親心だ、少し小才の
ある、手腕家らしい人に限つて、この本當の親心が解せない、時代の大勢だと
か、理想生活だとか、世相に順應するはよろしい、しかし、忘れてならぬこと
は、低い心の用意だよ、恵れた生活に慣れて、昔を思はぬ人になつたら、おし
まひだから——

それも、これも、みんな老人の寢言だと思つてほしい、仲よくお互に援け合つ
てゆけば、これほど楽しいことはない、店は皆んなのものだから、店の發展は
皆んなの發展に外ならぬ。

今日はこれでやめようね——」
ほつとした様に、寢返りされた老店主の双眼には何の意味か涙が湛へられてあ
る。

店祖の長逝

過去幾十年、自ら行ひ、自ら悟つた、體驗の精髓であり、處世のエキスであつた。

用語は平凡なれど、眞理は光る――

この言葉――この教訓を、時に觸れ、折に應じて、聽ける者は、おそらく、筆者だけではなかつたであらう。

十二月五日――

老店主が萬難を排して、最後の思ひ出にとの切望で、來若された日から丁度、一ヶ月目である。

症狀急變の兆あり、郷里竝に關係各方面へ招電を發し、萬一に備へるのであつた。

意識は明瞭であつたが衰弱甚しく、痛々しい、福岡の大學病院から某醫博の來診を乞ひ、主治醫との協力に俟つたが、最早重大時期に到達せることゝて、回生

の方途はなかつた、朋友、下田房吉氏は、殆んど毎日の如く見舞はれ、病店主を慰め自家の専門施術に依つて、患苦の輕快に努められた。

かうした一切の努力も空しく、容態は刻々惡化しつゝ不安の夜に入つた。

×

明くれば六日、――未明四時、愈々重態を傳へられ家族を初め全員病床に近く憂愁の想ひに閉されつゝ詰かける。

病店主は既に呂律の自由を奪はれ、呼吸も苦しいらしい、この時突として見護る人々へ對し、何かの合圖があつた、老眼を極度に見開き瞳孔に異常の閃めきがある、すわ臨終近し、と、若主人を第一に、順次、己が名を叫んで、握手し、永別の赤誠をさゝげるのであつた。

と――見れば、今地上の最後に臨む老店主の双眸から、はらくと熱涙がこぼれてゐる。

店祖の長逝

何を語り、何を示す涙ぞ——
やがて、苦悶一瞬の後、口邊に莞爾たる微笑が浮ぶ——そして、遂に糸は切れ
た。

おゝ！ 臨終のほゝゑみ——

平安にして聖者を偲ばしめる大往生である。

時に——享年六十一。

刻は昭和二年十二月六日午前五時であつた。

外は蕭々として泣くが如き細雨煙り、寒冷殊の外厳しく、この訃を悼むかと思
はれる。

枕頭にある家族、知己、店員達の悲愁、痛哀、言語に絶するものであつた。

×

吾等の老店主、遂に長逝さる——

悔ゆるも及ばず、泣くも又達せざるを如何せん。

思へば、在世六十年、苦難の生涯であり、光輝の一生であつた。

丸柏創建の偉業と、丸柏精神の父績とは、この店の存する限り、永遠に不朽で
ある。

×

喪は發せられた——

悲しくはあれど、店祖が第二の故郷の地、若松に於て、しかも、畢生の努力の
結晶塔を仰ぎ、

「——これで本望じゃ——」

と、漏らされたことは、せめてもの何よりであつた。

七日は、現店舗にて告別式を行ふ、しめやかにして、盛大、故人の遺徳を偲ぶ
にふさわしい情景を點出した。

店祖の長逝

茶毘に附されたる遺骨は、近親者に護られて、はるく翌日は郷里へ——一ヶ月前勇んで發つたあの故山へ——哀しき歸郷である、

「——すぐ戻つて來ますよ——」

あの言葉は眞實であつた、豫感なき魄のさゝやきである。

明けて九日、哀愁の裡に、菩提所長福寺に於て莊嚴を極めたる葬儀が執行された。

永切に憩ふべき安らひの地——それは瀬戸の浦曲の草深き處、島の山々に包まれて、靜かに眠る吾等の店祖——

英靈は、今も、尙、空間を超えて、この店の上にあるであらう。

遺影芳し

傑出せる人々は、作意なき、あるがまゝなる歩みの中に、幾多の學ぶべき足跡を残してゆく——

今は亡き店祖の逸話にも、在りし日の、なつかしき面影を彷彿たらしめる資料が豊富である、或は老梅の薫るが如く、或は松柏の巍然たるが如し。

徹底せるあの生涯は、そのまゝが尊い教訓であり、有難い戒諭であつた。

或時は、暖い慈父であり、或時は、優しい恩師でもあつた、働きの人、謹嚴の人、質素の人、——實に、典型的なる徳の人である。

その膝下に、縁あつて哺育長養を蒙りし、人々の至幸、至恵、よく筆舌の盡す處でない。

父なる星を失つて、既に春秋回ること八——眼を閉じて、追憶の夢を追へば、

店史四十八年

遺影芳ばし

あの折々、若き魂のスクリーンに、くつきりと映寫されたる、あれこれのシーンが、そのまま、描出される様である、あるひは、嬉しく、あるひは、楽しく、又は涙すべき事どもである。

この環境と、この慈父との下にありたればこそ、お互に今日の幸慶に浴し得るのではあるまいか。

吾等は斷言す——今、相率ひて、丸柏を護る人々の内に、若し、スタートを異にし、他の境遇に置かれたる場合を假想せよ、而して、尙、無難無事、何等の脱線なく、座折なく、榮冠の獲得に成功せしならんと、大呼し得る者、果して幾名ぞ——

あの、——いぶせき農村の伏屋に長じ、漸く學窓を巢立ちしまゝの雛鳥が、許されて入店せし日の情景と、——感銘は、おそらく、終生忘れ得ぬ深き心の印像である。

その時、腦裡に刻まれたる感懐こそ、眞人生の貴き指針であらねばならぬ。

威張る勿れ、自負を止めよ、萬一自惚の萌芽を持たば、餘りにも僭越である。

野生兒にして、人の世の東西を辨ぜず、左右を解せざりし、當時の鼻垂れ小僧が、今日の地歩は、まさしく、店祖の餘蔭に外ならない。

順境にある時は、得て、一種の錯誤に陥り易いものである。

それは、自己の力量を過信することだ。

茲に、一人の百姓がある、孜々の丹靑空しからず、稔りの秋を迎え——收穫甚大なるを眺めて曰く、

「——俺の力で、この増收だ、何と云つても、俺は偉い、ヘンどんなもんだ

い——」

と——……

愚かなる百姓を憫みたい、成程、營々努力の功績はほむべきである、しかし、

遺影芳ばし

太陽と、水と、空気と、そして大地の恵み——否その背後に嚴として實在する偉大なる力の働に依ることを、忘れてはならぬ。

吾等の人生は、偉いなるものへの奉仕である、創造への參與である。

同じ意味に於て、吾等は現在の脚下を省察せねばならない、錯覺は禁物であるお互に、店祖の詩かれたる、生命の種に、參劃し、加勢し、その成長に貢献すべき責務をもつ——

而して、功成るの日、店祖の偉績を頌するの外、一片の私驕も赦るされぬ。

吾等は常に、天恩を知り、自然に寄與する、心低き百姓でありたい、そこにこそ至高の理想があり、最大の使命を發見する。

今、思ひを、遠く昔日に駆せて、店祖の遺影に芳薫を感じ、寸滴を掬み、片鱗を拾つて見やう。

なつかしき、思慕の心——、慈父のみたまにさゝぐる、愛し兒の至情である。

○

柔かい春の陽が、賑やかな大通りに流れて、行交ふ人の心も踊る、うらゝかな或日——

「——あ、もしく、あのお宅の御主人に一寸お目にかゝりたいのですが——
取次いでくれませんか、——」

堂々たる洋服紳士、いとも鷹揚に、言葉をかけた、今、店頭の間と、街路の掃除に余念のない半白の老爺——手織縞のゴツイ着物に、小倉帯と前垂掛の田舎番頭よろしくの態——紳士の言葉に、掃く手を止めて、

「はい——あの、どちら様でせうか——」
とてもやさしい物腰である。

「——いや、これを渡して貰へばわかるよ」
紳士はポケットから名刺を出して渡した。

店史四十八年

遺影芳ばし

老爺はそれを見ながら、静かに云つた、

「——あ……あのそれでは、〇〇會社さんですね、さうですか、どうぞお掛け下さい——」

老爺の態度は、實に鄭重そのものであつた。

「お手間とりませんから、——一寸だけお目にかゝりたいと、お願ひして下さい……」

紳士は依然として、手織木綿氏に依頼する、老爺は妙な顔して、考へてゐたが慇懃に、そして、にこやかに答へた、

「あの——主人は、……私でございますが——はい、そして御用件は、どんなことで——」

眞にこれ、青天の霹靂か——一介の掃除爺さんと見たは大失態であつた、紳士の狼狽振り、氣の毒さを通り越してゐる、極度の恐縮で全く顔色なし、

「エッ——あなたが——？ あの御主人様で——」

最前までの鷹揚さは、どこへやらである、

「——いや、只、主人と申しますだけで——これが——掃除が——私の役目ですよ——」

「——それはく、存せぬことゝて——とんだ失禮を申上げました——まさか御主人がこんな所の御掃除までしてゐられやうとは、——何とも申譯ございません、どうぞ悪しからず——」

「いやく、——掃除位が丁度、私に似合ひますので——」

「——全く、どうも——」

三拜九拜して痛み入る紳士——

老爺は相變らず、謹嚴そのものであつた。

往年の柏原呉服店々頭に於ける珍景である。

遺影芳ばし

×

この簡單なる點景の中に、店祖の面目躍如たるものを見る——一店の店主として、晩年病臥の日まで、殆んど、箒持たぬ日は稀であつた、掃除すること、それ自體は何程のことでもない、地位を忘れて、下座の實行に住する心——それは、凡人のなし得ぬ、境地である。

毎日、外路を掃き、水を撒くあの尊かりし姿——今も眼底に浮ぶ心地がする。

店主らしくない店主——店主ぶらないよき店主であつた、會社の外交員氏が感違ひしたのも無理からぬ。同じ様なことが度々あつた——笑へぬ事實である。

あの綿服に包まれた、人格の光りは、天成の至心から發する輝やきであつた、床しい澁さの美とも見え、浮華に流るゝ現代への清涼劑でもあつた。

○

秋——その或日、

午後の陽射しが、裏庭一面にはつと赫く照つてゐた。
そこには、大小取り交せて、幾十かの古下駄が、綺麗に洗つて、干してある、ふと見れば、その向ふの垣根に、踵んで、丹念に下駄の齒を削つてゐる人があ
る、——

誰かしら？

覗いて見れば、白髪交りの店主であつた。

云ふまでもなく、下駄は全部、若き店員達の履き古しである。

おゝ、無心に削る聖者の姿！ 神々しい情景である。

戦場のやうな忙しい店頭から、一寸裏に出てこの様子を、かひ間みし瞬間——

店員の誰もが無關心ではゐられなかつた、思はず背筋を電氣のやうなものが走る——無言のまま、店主の後ろ姿を拜むのであつた。

愛する店員達の爲に、温かき慈父の心——しかも、節約の奥義を實示する不説

店史四十八年

遺影芳ばし

の一大教訓ではないか。

勿體なきことである、洵に大愛の發露である。

真に不滅の大業は、かゝる處に立脚してこそ、成就する——

x

これは過ぐる頃、「柏苑」誌上に、發表された一店員の手記である、感激の大要である。

この實感は、當時の全店員が知る、店祖在ませし日の最も大きい思ひ出の一つである。

聞くは易く、行ふは難し。

誰ならば堂々たる一舗の店主として、店員の下駄を自ら洗ひ、自ら齒を削りて履かしむる雅量ありや、慈愛ありや。

這個のこと、只、天心の流露である、殊更に努めるでなく、淡々たる、風聲に

外ならぬ。

吾等幼かりし爲、當時、匆忙に紛れて、店祖の内なる深底に觸るゝ能はざりしこそ、遺憾の極みであつた。

併し乍ら、片影は、心窓を通して、全貌を想起せしめ、脈々、吾等の魂に躍動を與へる——

あの日、あの頃、秋の陽射しは、赫かつた、そして、もうあの裏庭は、あとかたもない。

○ 先代店主の面影が、時の流れを超えて、今、偲ぶ子等の心に、甦へる——

幾度か、店祖を働きの權化と書いた、而しそれは單なる形容詞ではない、農村に於ける少年時代から、商業創建の頃、そして、開店前後より、晩年まで、只働きの送迎であつた。

店史四十八年

遺影考ばし

店にありても、朝は必ず、誰よりも先に起き、いつも一人して、外路を掃き、水を打ち、然る後、漸やく、店員を起こされるのが常であつた。それも、極めてやさしく、

「——もうぼつく、起きるかの——向ひの〇〇さんにも店を開けられたらしいよ——」

と促れる。

晝は、無論、店頭てんとうに小僧こそうと同様、黄塵くわうじんを浴びての奮闘ふんたうをなし、其他、仕入、販賣、掃除、記帳等、忙しい、日課は繰り返された。

夜は深更しんかうまで帳場ちやうばに陣取ちんせつて、賣上、會計の事務じむに没頭ぼつとうし、就眠しゅうみんはやはり誰よりも遅いのが例であつた。

しかも、店員を、いたわること、吾が兒この如く、いつも愛語あいごを以て、犒かひひ、温顔を以て導みちびかれる、不ふ言ごんの實行じつこう百の説法せっぽうに勝る萬々ばんばんであつた。

言は

上阪仕入中は無論のこと、珍しく郷里きやうりに歸りても、寸閑すんかんあれば、厚司あつしに頼かむりの百姓ひやくしやう姿で、山行やまゆきをされる。

先代店主にとつて、働くことは、何よりの樂しみであり、唯一の喜びでもあつた。

勞働は、神聖である——その中に生き、それに没し得る人は幸福である。

精根の限りを盡して、全生ぜんせいを働はたらき通した店祖は、あの類焼るいせう以來、人知れぬ、心痛を續けられた爲に、目に見えぬ勞苦らうこが堆積たいせきして、定命ていめいを短かみぢくらしめたとも考へられる。

若く幼かりし吾等が、生前せいぜん不用意ふよういの内に、かけたる配慮はいりょも一再さいざいならず、顧みて申譯まうしわけなき心地こころちがする。

○

或る年——

店史四十八年

遺影芳ばし

父もなく、母もなき可憐の少年が入店した。

その兒は、境遇の爲か、常に、淋しさうな、極度に遠慮する性質であつた、しかし店主の意を體して、よく働き、まじめである。

老店主は、時折こんなことを漏らされた、

「——あの兒が、俺に、氣儘の一つも云つてくれるやうになつたら——と、いつも思ふ——可哀さうな子だから、なんでも、明るく育て、笑顔で暮せるやうにしてやらなくては——」

その兒は、店祖のかゝる慈愛を知るや知らずや——一、二年は夢の如く過ぎた或る日——

老店主が、大にこくくで、喜びながら語られる嬉しいニュース——

「——今日、あの兒が——例の××さんが、——珍しく、この俺に、お菓子かほしいと言つてくれた、そして、につこり笑つてゐたよ、あの兒も、この頃、

大分明るうなつて來たやうだ、本當に可愛い兒になつてくれて嬉しい、よかつたね——」

あゝ、この大慈！ その兒は、既に、年齒而立に近く、今、店の中堅である。地下に在ます、店祖の英靈もさぞ、満足されてあろう。

×

註に曰く、——

この店では、創始以來、店主が店員を呼ぶに、必ず「××さん」と云ふ、如何なる年少者と雖、呼び捨てにされた例がない。

人格尊重など云ふ、嚴しい氣持ちでなく、只、自然にさうなつてゐる——やさしい思ひ遣りの心から發する、この店の特異性とでも云ふべきか——

○

京都に仕入滞在中世話になる定宿がある、東本願寺前のホテルと云ふ別稱と共

に、丸柏に關する限り有名であり、誇りである。

この宿に就て、床しい、語り草がある。

先代店主が、初めて仕入に上京の節、近江商人某氏の好意ある紹介に依り、定宿とせるもの——實は、本願寺參詣の人達が、宿泊する爲に設けられた詰所であつた、随つて、建設地方の指定人か、もしくは紹介なくしては、投宿出來ぬことになつてゐる。

そして詰所だから、古びた家で室は暗く、掃除は行届かぬ、年中毎食一汁一菜木賃宿のそれに等しい、しかも當時から今日まで三十年一日の如く、設備に、待遇に、何の進歩もなく、變化もない、洵に古色蒼然たる、ホテルである。

先代店主は、終生、こゝを滞京中の本據として、誰が、何とすゝめても、美麗なるべき他の旅館を見むきもせず、

「——み佛様のお蔭で、店が發展したのだから、昔を忘れぬ爲に茲で結構だ

よ、——」

答へは、いつも同じであつた。

爾來幾年、現店主も、其他の仕入係も、同じ様な氣持で茲に宿泊する、昔忘れぬ心——そこに、萬世不易の根底があることを思はねばならぬ。

×

「——やあ……ようこそ——いつ御上京でした——」

「もう——一週間位になりますよ——」

「——ほう、さうですか、そして、今度のお宿は——？……」

「——例によつて、例の處です——は、は、は」

「例の處つて——あ、あのホテルですな——」

「さうです、名物、本願寺ホテルですよ——は、は、は……」

「は、は、は——あのホテルへ、——しかしよくお泊りになりますね、あそこ

遺影芳ばし

で、辛抱されなくても、——随分汚いし、不便でせう——」

「——まあ、慣れてもゐるせいかな、それ程ではありませんね、静かで、気がおけなくて、とても、感じがよろしいですよ、——それに、安くてね、は、は、は、は、——」

「——御笑談ばかり——しかし、誰でも感心してゐますね、現在の丸柏さんの京都の宿が、あのホテルと云ふので——私なんかとても、我慢が出来ませんね、……」

「——感心されても、されなくとも、私共にとつて、あの詰所は、忘れ得ぬ記念の宿ですからね——先代店主が苦勞の跡を偲ぶ爲に、今も、必ずあそこに泊ります——」

「——さうですか、さう仰有れば——でも、敬服しますね——」

「——あそこへ宿ると、不思議に落付けます、何と云つても、出發の日——店

の創成時代を忘れる譯には参りません——」

×

名物化した吾等の本願寺ホテルは、なつかしい、一種の記念塔でもある。

昔、忘れぬ心——店祖の遺鉢を壊してはならぬ、京都の眞中心地で、一泊、二食付××錢——要は、金錢の問題にあらず、先訓に學ぶ心である、虚榮峻拒の實踐である。

○

寸影を探り、相片を尋ぬれば、枚舉に遑なき有様である。

吾等の店祖は、かくの如き、德行、正踐の行者であつた。

現在に於ける店の盛大を誇るならば、先づその淵源を知り、以て、故人の前にぬかづき、深謝の寔をさゝげざるべからず——

静かに、筆を擱けば、春宵の燈下、芳香、遺影に高く、徘徊、願望、徒らに久

店史四十八年

旭日は昇る

しきを如何せん。――

旭日は昇る

新店主登場
――昭和二年――全六年――

陽の入りしあとに餘光あり、落照 西の方、山のうねりを超えて脚下の細草に
薫ず――

瞬又刻、暮れゆく雲は、静けきたそがれの空をこめて、夜色漸く、微茫たらむ
とす。

あゝ、淋しき落日を仰いで、泣きける者、そは、丸柏をめぐる、すべての若き
子等であつた。
しかし――

大地一轉！ 鐘聲に黎明を告げ、東天ほのぼのと紫雲棚引くを望めば、夜來の
愁靄、徐々に晴れて、水平線上、旭光一綫――指呼の峰巒金翠を呈する頃、一搖
の清風に萬物生々として大地に躍るを見る。
おゝ、旭日は昇る！

× 店祖逝きて、新店主の登場となつた。

悲色を拂つて、希望の門出に立たねばならぬ、それが、祖志を生かし、衣鉢を
護る所以である。

新店主は、間もなく、舊名、茂を廢し、すべてを父祖にあやかるべく、柏原善
藏を襲名した、時に年齒、三十四――

店礎漸く、鞏固を加へ、躍進の途上に於ける、不測の店難に一抹の寂寥は覺え
たれど、遺統を繼承して、即刻輝かしい新星の登場に、何の蹉跌もなく、何の不

店史四十八年

旭日は昇る

安もなかつた。

若き店主は、店祖在世中既に經營の樞軸たり、實務の中心であつたが爲め、事業の進運には何等の支障もなかつた。

愈々丸柏の總帥として出臨し、得難き後継者として、從横の活躍は開始された何の幸ひぞ——、この新店主を擁して、帷幕に參ずる人々は、みな壯靑氣銳の若武者揃ひ——鐵蹄の音も高く肥馬を陣頭に進むる雄姿は——實に軒昂、凜然たるものであつた。

随つて、店業は日進月歩、隆々昌々の坦道を走る——

昭和三年は、今上陛下の御大興行はせられ、世は擧げて、昭代の慶祝に歡呼し服飾界の黄金時代を現出せし爲、店の成績も、未曾有の數字を示した。

春に男店員四名、夏に女店員二名の増員をなす——女店員の採用はこれを以て最初とする。

この年の九月一日、全員の生活に重大なる役割をもつ——柏苑會なるもの生れその會誌、「柏苑」の發刊を見るに及ぶ。

實に向上は無限である、總員結束の力はおそろしい、何でもやれる、何でも出来る。

かくして意義深き年は暮れた——

x

昭和四年の新春劈頭——店史に又特筆すべき、歡ぶに足る事件が発生した。

それは、頃年の宿望であつた店章の改更である——

一月一日を以て從來の(丸)を改め、新しく(楯)に制定した。

柏原の頭字をとり、一目にして、柏原吳服店を聯想せしめる宣傳効果と、漢字よりうける矜持の昂揚とが理由であつた。

店章が及ぼす活動員への影響は、潜在的に甚大である、一つの革正には、かな

店史四十八年

旭日は昇る

りの熱慮と果斷が入る。

新しき店章を仰いで、店員は勇躍するのであつた。

この年も四月に、男店員四名の新入者を迎えた、嬉しい増員である。

x

昭和五年の春、櫻さく四月、又二名の男店員が入店した。

店の忙しさは、増員に正比例する。

この夏、時の若松商工會議所理事長、佐藤龜清氏の條理を盡せる幹旋と調停に依り、多年組合脱退のまゝなりしを、圓滿復歸加盟をなすに至る。

組合發展の爲め慶賀に堪へない。

覆水漸くにして盆に歸る、和氣滿巷、組合側より誠意ある協調の誓約を得て、

吾等又、欣快これに過ぎたるなし。

x

昭和六年も同じく、三月に男子二名と、十二月に女店員が三名入店したのである。

この時總員三十三名、新店主登壇以來、四度の星霜が去來した、采配の示すままに、戦線を馳驅する將兵は、風雲を捲いて、懸旌萬里の慨があつた。

この間、地歩は、着々上昇を辿り、既成老大商店の陣營に肉迫突貫し、鎧袖一觸——やがて、井中の角逐は終末を告げ、遠く洞海を隔て、全北九州の斯界に

呼びかくる日の近きを思はしめるのであつた。

吾等は推移のあとを靜かに眺め、難關突破の度に恵まれたる一切を感謝する、而して、目に見えぬ、偉大なる力への合掌を忘れ得ない、切々の至情は凝つて禮拜

となり、讚仰となる——

x

旭日は昇る——

店史四十八年

旭日は昇る

新しき店主は、若き柏原の太陽であつた。

先代の衣鉢をそのまゝに、店員を愛すること弟の如く、又は妹の如く、一視同仁、その幸福を念じて、倦む處を知らぬ有様である。

東奔西走——京阪の仕入に、交際に、郷里との往來に、折衝に、寸閑なき忙裡にあつて、尙、店員の爲、三度の食卓に留意し、係員をして美味と榮養に努力せしめ、連夜、或は隔日に、全員を樂しませる茶菓の給與など、莫大なる經費を顧みず、只管「樂しき生活」に依る理想顯揚に専心である。

店員を信ずること——それは店祖創業以來の不文律であつた。

「——俺が金庫の番をしなくてはならぬ様になつたら、この商賣を續ける氣にはなれぬ、信じて任すことほど氣樂なことはないよ——」

これが先代の口癖であつた、そして店の金庫も帳場の金庫も、絶対開放——幾百幾千の現金を店員の自由に任された、殊に店の金庫は恰も賽銭箱の如く投込式

で出納勝手次第と云ふ、實に大膽な、徹したる信に依つて經營されたのである。

信は眞であり、絶対の安神であつた。

信じ得る者は偉大であり、信ぜらるゝ者は至幸である、信の世界には毫厘の過誤も生じなかつた。

その歸結として丸柏今日の盛隆を見る——

體驗なき者は不思議と評するであろう。

この驚異とされる、信の實行を、新店主は無論踏襲された。

後年經營の近代化と、數字の明確化を期する上から、レジスターの購入設置に依つて、あの信の紀念的店寶とも云はれる賽銭箱式金庫が店頭から影を沒したことは寂しい事實であつた。

而し、その信頼度に於て、當時も今も變りはない。

新店主は、幾日、幾十日、否幾百日に亘る旅行や歸郷の際など一切を店員に任

店史四十八年

旭日は昇る

せ、不在中の心配は毛頭もなかつた。

信ずる者、信ぜらるゝもの——幸福は共有である、勿體なき實際である。

多忙につけ、閑散につけ、店員を糺ひ、いたわる心——公休日の折りふしに、

店費を以て映畫を鑑賞せしめ、遠足の馳走に親心の暖かさを示される。

修養のことに就ては、時間と経費とを惜しまず、事毎に取入れて全員の向上に

資し、研學のことに就ても事情の許す限り同様の計らひをする。

春秋二季の店員慰安會に關しても、莫大の店費を以て旅行、見學、慰安の道を

講じつゝ今日に及ぶ——

精神的並びに物質的待遇——もとより他に比類を見ずと聞く——

新店主の徳風は、清彩多岐、自發の天心に基きて環境の總幸福化に全精神を傾

倒せられてゐる。

しかも、黙々謙讓にして陰々の内に事を行ふ、至誠の人と評すべきか——

大愛は時に空氣の如く、水の如く、又太陽の如きものである。

これなくしては、寸刻も生くる能はず。

しかも、これに心からなる感謝を日夜さげつゝある者、果して幾許ぞ——

今、在店の人々にして、如上の語に對し、共鳴、反省なすあらば幸甚である。

新店主はまさしく吾等の太陽であつた。

現存の人を素描し、月旦することは本意でない、或はお叱りを蒙るかも知れ

ぬ。

しかし、丸柏展望の視野に巍然たる存在である以上、この程度は許して頂けや

う。

この書はもと／＼局外者に公開すべき性質のものでなく、又その意圖は全然な

い。

片鱗を叙して、この傘下に集ふ者の幸福を欣舞祝禱してこの項を結ぶ。

店史四十八年

再度の試練

X

吾等の丸柏は、常に若く、永遠の青年でありたい、旭日ならば、まさに東方の雲際を出でて、冲天を指す、あの瞬間でありたい。

壯なる意氣——青なる躍動。

永久の若さは、あの純真なる光りの中にこそ發生する。

再度の試練

倉庫類焼—別館焼成

昭和七年—全八年—

突如として曉闇を破る警鐘亂打——黒烟は天に漲り、火焰は地を壓して凄慘言語に絶す。

これが出火當夜の形容である。

吾等にとつて——再度の試練であつた。

昭和七年五月二十二日午前三時——

目貫街、旭座劇場附近より發火、見る／＼内に數軒を舐め盡し、その餘燼は不運にも、路を越えて、店の倉庫に飛來延焼したのである。

しかも、入口正面よりの炎上にて、殆んど在庫商品搬出の間隙なく、袋の如く裏道なき建築物とて、當直員達さへ身を以て脱出せし程であつた。

消防當局の決死的盡力も甲斐なく、折柄の第一回夏物新仕入商品の全部を荷物のまゝ満納して、みす／＼烏有に歸し去られたのである。

莫大なる損害であり、甚大なる痛手であつた。

往年の大火災の如く、禍域廣汎に渡らずして、終熄せしは何よりのことである

三内町通り南側としての被害は、店の倉庫だけであつた、夜の明けるを待つて現場を見れば、累々たる大荷物の殘燒——百個に餘り、豊富を誇りし常備在庫商

店史四十八年

再度の試練

品は一物も止めず、惨状目を掩ふの外はなかつた。

先年の苦難に鑑み火災保険の契約はあつたが、家屋と常備商品に對する、充當額に過ぎず新入荷品の全部は純然たる損害である。

天譴であつたか、試練であつたか、

それは、今知るよしもない、只、儼然たる目前の事實に吾等は深く省察すべき或るものを悟らねばならぬ。

この日は店舗を閉ざし、全力を擧げて、焼跡の整理にかゝる——

焼残品は流石に山をなす程である、水と火で、あわれを止める荷物を開けては店舗横手の街路に積んだ、すばらしい大量である。

即刻旭座劇場を借り入れ早朝大處分を敢行するのであつた、好意を寄せらる、大勢の應援者によつて、準備成るや、時を移さず午前八時開場した、何處より押し寄せるともなく雪崩れを打つて亂入、殺倒——修羅を現じての大入りである。

殆んど、狂亂、怒濤の壯觀を呈して、見る／＼内に形付いてゆく——

全く、二足三文値である、賣るのでなく、買ふのでなく、投捨てと、もぎ取りの混雑と云ひたい。

かくして——

さしも大量の焼残り品も、場内一物も餘さず、賣台に敷いた、用布の一片までなくなつてしまつた。

その間、僅かに五十分——

只々、一驚三嘆するも及ばぬ物凄さであつた。

これで焼残品の處理はすんだ、店舗は、平常通り開き、支障もなく營業はされる。

十二年前の災禍と異り、本陣は微傷を蒙りしに止まり、翌々日、既に開店の運びに到る。

再度の試練

嬉しいことであつた、灰燼に歸した、財的損害は甚大であつたが、本營が災亂の渦中に陥らず、洋館の信用組合を隔て、倉庫のみにて鎮火せしは、天未だ吾等を捨てずの神祐と信じた。

事情かくの如く、尊き第二の試練であつたが、往年の如き血涙を絞るの惨苦はなくて、至極順調に、復興への着手も容易であつた。先づ、夏物の再度應急仕入に奔走し、次いで倉庫再築の計劃に力を注ぐのであつた、災後直ちに店主は上京し、あの大量なりし巨額の新荷と同量の商品を又々新しく仕入れ、急送の手配をなした、而して入荷のまゝ全然手を附せず倉庫内にて烏有に歸したる商品代の全額を、即刻それ／＼支拂ひしたのである。

無論毫末の交渉も、同情に訴へるが如き手段も講じなかつた。

この點、實に堂々たる態度であり、襟量であつたと、我乍ら今も痛快の思ひ出である。

それは當然なすべきを爲したに過ぎない。

なれど——淺ましき世情の一般に照して、珍しい出處であり進退であるとは後日誰彼の評であつた。

かゝる際に、事を構へて泣きを入るゝなど、男兒の執るべき本領に反すると信ずるまゝを斷行したのである、現店主の片鱗を語る一話題と云へよう。

かくて疾風の補充仕入の完了を見るや、間髪を容れぬ敏速さで復興、躍進の旗幟を押し立て——夏物賣出しのトップを切つた。

果せるかな、全市各層の求望に投じ、暴風の賣行を示したのである。

販賣部の方はこれで一段落と言へる。

x

七月十九日——

かねて交渉中であつた、元倉庫隣接地、約四十坪の購入成立する、やはり宮野

店史四十八年

再度の試練

氏の所有地であつた、即ち新舊土地合せて八十坪の地面に、豫備商品庫を兼ねたる別館新築の腹案も——新購入地内にある住宅の移轉その他で、かなり時日を要し、建築設計も幾度か變更改訂を行ひ、愈々着工し得たのは、肌寒き霜月に入つてからであつた。

設計士は、當時若松市役所土木課勤務の伊藤勝巳氏である、建築請負は、武田工務店であつた。

外觀は二階建洋風、内部は和式として三階である、基礎工事だけでも随分日子を費し、天候と、寒氣の爲に工程遅々として進まず、やがて歳の瀬は迫つた。

この年は、諸種の都合で、成績グラフの指線も稍や落調の足取りを示してゐる只、十月の移轉紀念賣出だけは、依然として輝やかしい。

春から人事の方も多端であつた。

男子四名の入店に、珍しく一擧四名の退店者あり、女子二名入店して又一名の

退店があつた、何れにしても受難匆慌の一年ではある、暮の寒威も殊の外厳しく氷雨あり、風霰あり、雪又霜の連続であつた。

再度の試練——

由來、祝融子に見舞はれる年は、業績も振はない。

災厄は、とかく弛緩せんとする精神の空隙を襲ふかに見える、心すべきことである。

まさに奮進蹶起を要すべき重大の年であつた。

X

明くれば昭和八年——

昨年の悔みを再び重ねず、一擧にして、あの火害に依る缺損を奪還せんと意氣巻くのであつた。

随つて爽朗清鮮の壯意、全店に溢れ、戦はずして已に勝つの概を示し、眞に當

再度の試練

るべからずである。

四月に入つて、男子三名の入店あり、増員の欣びに心も勇む――

正月以來、鶴首して待ちし別館の竣工も近い。

遂にその日は来た、理想實現への前提である、類焼以來十一ヶ月目に漸く翹望の日は訪れた。

x

四月二十日――

吾等の別館落成す、別館の名は竣工成りて後決定されしものである。

四邊を壓して聳立するこの偉容――

なつかしく、嬉しき試練の賜のである。

一階は豫備商品置場、編庫、食堂、炊事場、洗面所、浴場、手洗處等を配備され、後に洋裁部も移した。

二階は、店員の講堂兼宿舍とも云ふべき三十疊の大廣間あり、その外十疊の客間を中心に、長方形の店員勉學室、七疊の婦人室、四疊半の豫備室と中央に建築法規に基く、一階より三階まで打ち抜き空間がある――

三階は洗濯物整理處、店員所持品置棚、娛樂場、雜納處等であり、屋上に水道の設備ありて洗濯其他干物をなす――

擧げ来ればこの別館はまさしく店員の爲の建築物であるかの觀がある。

莫大の敷地竝に工費をかけて、其大半が、店員の爲の生活施設であるを思ふ時平氣であつてよからうか。

理想的設備――それは必ずしも理想的人材の母體ではない、むしろ逆の場合が多いかも知れぬ、完全なる設備から完全なる人格を生むことは容易でない。

要は心の持方である、惠るれば惠まる、だけ感謝してそれを生かし、合掌してそれを愛護する低き心に歸りたい、常に貧しき魂の自覺に住して、この別館を利

再度の試練

用する時、効果は倍加し、価値は増大するであろう。

店主の眞意も又茲に存することを悟らねばならぬ、當時かくの如く互に相戒めて偉容を仰ぎ欣舞の情を禁じ得なかつた。

別館の新築は、形の上に於ける試練の結實であつた、復興であり伸展である。しかし――

試練の眞の成果は、内的生命の反省刷新、乃至は改造飛躍であらねばならぬ。かゝる見地から當時全員の努力精進は雄々しかつた、緊張と奮進に全力を傾倒したのである、満ち足れる幸は、丸柏を包みて洋々たる前途に耀く光を投げるかに見えた。

X

時は今、花影撩亂、盛春を謳歌する四月であつた、霞みのどけき野に山に、若き心は逍遙する。

再度試練の難局を突破して、店にも春の和風は揺らぐ――
嬉しく、楽しく、希望にみちて、若駒は躍る――試練のあとの朗らかなる情景は、忘れ得ぬ悦びであつた。

輝く新陣容

別館新築竣成より新社まで
昭和八年――十年――

時々、刻々、大自然の運行は不斷にして、無始の始めより、無終の終りへと伸展する。

神祕ならぬ神祕――生々化育。

偉大なる力の前に、跪拜せざるを得ない。
而して――

店史四十八年

輝やく新陣容

大自然の精神に叶ふならば、必ず伸展し、然らざるものは、必ず壊滅するてふ真理を信ずるものである。

今は昔、誠の人——吾等の店祖が、一粒の實を大地に播いた、それが芽をふき双葉となり、幼樹となつて、今や英氣潑刺たる若木たらんとする——

大自然の心に合致せしや否やは知らず、生命あるもの——なるが故にこゝまで成長したのである、至誠の息吹きに依つて哺育されたのであつた。

この衣鉢を継ぎ、この若木を成育せしめんには、今ぞ百尺竿頭一步を進めて、鋭利なる内顧のメスを振り、天地の大道に即したる方針と經營に入らねばならぬ幸ひに、全員の願ひは一つであつた。

若木には翠滴る青葉あり若葉あり、さし昇る朝陽にキラ／＼と映潑する——。

昭和八年四月、別館の竣成と共に、丸柏の陣容は内外に亘り一新した。

先づ従来店舗内にありし食堂、炊事部、浴場の別館移轉が行はれ、店舗階下の大擴張となつた。

間もなく多年の懸案たりし、雑貨部の新設を見るに至り、やがて姉妹關係にある洋裁部も創設された。

躍進！又躍進である。

この雑貨部は、將來丸柏傘下の一大部門として従横の活躍を期待されてゐる。時代の趨勢たる、服飾洋化の尖端に立つて大飛躍を試むべく、虎視眈々の姿勢である。

洋裁部も又それに附随して澎湃として漲る洋装化の時流をねらひ、輝やかしい未來が約束されてゐる。

かくして、丸柏の陣營に、新部門の登場を機縁とし、期せずして活氣は全店を奔流するのであつた。

輝やく新陣容

洋反、服地部の大進出、京吳服部の大擴充と高級化——等々々。
一波の動きは、聯關して各部に波及し、伸張充實の聲囂々たるものがあつた。
全店を搖るがすこの覇氣は、餘力を驅つて、ずさまじい戰績を擧げてゆく——

X

連年地方的名物化した、恒例の移轉紀念大賣出しも、昨年度より標題を改め、
全的永久の謝恩日とし『創業祭』と銘打つて年中の最大行事となつた。
殊に今年は趣好を更へ御買上高に應じ、御買上票をさし上げ、それに依つて漏
れなく紀念品を呈上した。

十月二十八日より三日間——

白熱的賞讃を浴びた日である、この日の盛況は、今更詳述の要もないであろう
只、壯絶の一語に盡きる。

燦然たる服飾販賣の一大繪卷であり、賣出し望觀の一大豪華であつた。

商品の奉仕と共に、莫大なる犠牲である。
丸柏がなし能ふ純正奉仕の最高峰である。
當年は五月以降洋裁員、販賣員を通じて實に十三名の女子入店者があつた。
一躍して總員五十二名——堂々たる陣容である、赫々たる發展である。
年頭に於ける全員の誓起空しからず、歳末に示されたる成績の跡は、斷然良果
を擧げ前年度の不遇を挽回して、開店以來の新記録を劃するに至つた。
かくして店勢は日を追つて擴大し、膨脹し、組織の強化と陣容の整備を要求す
る。
雜然たる經營の舊殻を破り、整然たる一大統制時代の顯現を翹希するのであつ
た。

個人經營から法人組織へ——
時代は急角度に變遷する、流轉する。

店史四十八年

輝やく新陣容

x

昭和九年一月一日——

この佳晨をトし吾等の合名會社、柏原吳服店が出現し、結社された。店史に千鈞の重きを加へ、本格的躍進への前提である。

資本金十八萬圓——

而して、土地、建物、店主の個人所有に屬し、資本金の外である。

組織は變更され、會社の形體は成つた。

愈々累年の宿望は達せられ、事務の明確化と仕入の單一化——販賣の簡易化と人事の統一化に對して大刷新の機會は到來した。

あゝ輝く吾等の新陣容！

丸柏の全面に亘つて一大統制の確立を期せねばならぬ。

販賣部も次第に専門化し、各部に主任を置き、仕入部も店主を顧問として二大別されるに至る。

往年の年少者級が、既に齒積而立の前後にあり、それ／＼一方の旗頭として活躍すべき天地は廣い。

壯き店主を中心に、全軍嚮を竝べて募進する用意は出來た。

小手を翳して北筑商戰の曠野を望めば、近く、或は遠く、混亂の巷、風塵の渦巻くを觀る。

思へば 吾等の責務や重し。

x

この年は、實に長足の飛躍をなした。

階上京吳服部の擴張に次いで、階下中庭を除き、擴充、大改造を斷行した、仕入も従來の店主中心制に一步を進め、洋反、雜貨を一括し、關東物、京吳服を一

店史四十八年

輝やく新陣容

結し、二大部門にそれ／＼専任仕入係を配して、仕入と販賣の圓滑統制に留意された。

何れも刻下の急に備へしもの——過渡期に於ける暫定制たることを俟たない何れ不日、本格的永久性一大統制案の確立を來すであらう。

かくして、全員は自己の持場に熱火のベストを傾盡するのであつた。果せるかな、各部の成績は異常の跳騰を續ける。

而して——

京阪産地の問屋、會社に於ける丸柏の信用は、年々増大し、デパートは知らず

——吳服、小賣業界の驚異的存在として、北九州の白眉となつた。

店史の語るが如き、磐石の根底に立つて、この盛觀を見る、自畫にあらす、自讚にあらす、嬉しくも儼然たる事實である。

×

昭和九年は殆んど、わき目もふらぬ猪突の一歳であつた。即ち、賣上成績に於て驚異的空前の最高レコードを示し、全員をして、むしろ啞然たらしめてゐる。まさしく、精勵の賜である。人事の異變も多かつた。男子四名入店し一名の退店あり、女子十五名の入店に六名の退店があつた。年末の調査に基づけば、活動全員、實に六十有一名——賑かにして、頼もしき同志の數ではある。

×

昭和十年——新歳の幕は擧がる……

歳旦の辭

店史四十八年

輝やく新陣容

新彩融々、王化蕩々、鳳曆目出度くも革りて、昭和第十年の春晨を迎ふ見よ！ 神國日本の榮光連綿として、皇紀實に二千五百九十五年を算す、儼呼たる、この一大事實に對し、誰か 崇高至純、名狀を超えたる感激に咽ばざる者あらむや、仰げば 瑞靄寰宇に滿ち、山河、草木、一つとして、新たならざるはなし、吾等、今 沐浴して、舊塵を洗ひ、身心清淨、本年の第一頁を繰らんとするに當り、先づ 肅裝正姿、以て恭しく、東方遙かに皇居を拜し、謹しみ、虔しみて、
 聖壽の萬歳と、寶祚の無窮とを祝ぎまつり、至眞、至誠、皇運の隆昌を禱り奉る。

静かに眼を閉づれば、芙蓉の嶺の彼方、雲烟縹渺たる處、二重橋を越えて、聖天子在ます大内山の祥氤、澎湃として眸裡に映じ、恰も、新日本の佳朝、親しく帝都に拜賀するの感、いと深きこそ畏しとも畏し、おゝ！ 生をこの國に享

け、この國に活き、而して、この幸慶に浴する我等、何を以てか、報恩の洵を致すべき、迎春歡喜の中に、なほ且湧然として、この心なかるべからず、驟然として誓はざるべからざるなり、想ひを潛めて、脚下を顧れば、去歲努力の業績、歴々として光輝を放ち、宛然、吾等が奮闘の勞を慰撫するに似たり、時局が生める財界好轉の余恵をうけて、順風舉帆、昨冬二月の階下改造擴張を契機とし、新進の雜貨部、愈々本格的躍伸を遂ぐるに至り、勢ひ全店の充實は目覺ましき迄の發展を示し、購買層の向上は、商品の飛躍的高級化を招來するなど快哉 又、快哉、即ち販賣成績に於て、斷然、創業以來の最高記録を獲得す、生等の欣悅朗喜、何ものか是に過ぎむ、然れども、この榮冠の裏に、凱歌の裡に、貴き同志の汗と熱との織り込まれたる、言を俟たざるなり、加ふるに、照々たる店祖の明助と遺徳の然らしめたるを思へば、只々感謝の二字に無量の赤心を籠めて酬ゆるの外あらざるなり。

店史四十八年

輝やく新陣容

誠つて、新歳の劈頭に於ける吾等の抱負、吾等の計画や如何に、今や、活動職員六十有余を數へ、陣容整備、歩武堂々、正に業界への一大進軍を爲さんとするに際し、嬉しくも、全員の精神的中心たるべき、店旗の謹設、樹戴を見るに至る、寔に森嚴無比、雀躍、同慶の極みなり。

試みに視よ、金色燦然として耀く、吾等の店章、配するに相抱く二片の柏葉と三顆の柏實を以てす、更に、佳厚、正純を語る紺紫の地色、金簾七寶のフレン尹など、一つとして丸柏精神の發露たらざるなく、殊に竿頭店章の内部に奉戴の勅語、竝に店主齋戒の揮毫に成る不磨の店は、「正道奉仕」「商道報國」の文字は、誇るべき店魂の一大象徴なり、尙特筆大書すべきは店名の改稱にして店章をそのまゝ、「丸柏」と命名し、自今、新商號を翳して平和の戦線に臨まんとす、この企畫こそ、宿年の待望にして、至終の斷案たり、伸展途上、幾多未來への指唆を含み、悠々莞爾、店旗が包藏する黙々の雄圖、知る人ぞ識る、ま

こと、大理想實現への第一歩にあらざして何ぞ、勇往すべく、邁進すべく、課題は明かに提示されたるなり。

さあれ、未踏の將來、益々多事、全員團結、敬愛協信、以て乾坤一擲の大業に參與せざるべからず、一層の奮起を希ふや、洵に切なり。

再び 頭を回らせば 麗陽四表に浴き、歲華一新、昭代の惠澤、眞に窮りなからむとす。

あゝ、賀して祝し、祝して壽ぶく年の旦、萬象多望の翠色を帯び、生彩、評するに語なし。

聊か所懐を連れ、元旦の店辭となす。

昭和十年元旦

合名會社

丸

柏

輝やく新陣容

右の一文は年頭拜賀式に於ける歳旦の辭である。

別館講堂の式場に集るもの、百數十名——店主を筆頭とし、全店の總員に、專屬の和裁部、整理部、紋書部を加へ、森肅莊嚴、實にこの店ならではの、味へぬ堂々たる恒例の式場に於て、宣布されたる店辭である。

店旗の樹設、店名の改稱——

共に洋々たる青年丸柏の前途を卜するに足るではないか。

お、輝く新陣容！

やがて、櫻咲く頃ともならば、豫定の入店増員あるべく、總員八十名にも達するであらう。

明日に備へて——

來るべき日の爲に、工作は着々と進み、幻ならぬ幻を追つて、秘策は既に密室を出でんとす、待たる、理想實現の日——

逝ける店母を偲ぶ

昭和十年



在りし日の初代店母

朝の露、夕の雲——

姿あるもの、形あるもの、やがて、

儂くもこわれ、ほろびて、いづくへか

歸りゆくさだめなるを——

花散る夜半、星落つる晨、おろかに

も悲しく、あわれにも淋しきを如何せん。

そよとの風に、あとかたもなき泡沫

の、消えゆくにも似たる人の世ぞ——

仰げども、なつかしき光絶へて、今やあらじ——まこと夢にてはあらざるを——

店史四十八年

逝ける店母を偲ぶ

x

昭和十年一月十二日午前二時——

吾等の老店母郷里に於て遂に永眠せらる。

余りにも意外、余りにも率然であつた。

あの健やかな温容に、慈しみこもるあの言葉——今も今、眼前に彷彿として浮んでくる。

うそだ、うそだ、と云ふ聲さへ聞えるやうだ、信ずべく、余りにも唐突であつた。

その前日、某家の法要に列し、墓參、念佛を了へ歸らんとするや突如昏倒——すわやと程近き親戚にて手厚き應急看護に依り、意識は恢復したるも、夜中を過ぎたる頃より、病勢俄に革り、遂に翌未明、長逝せられたのであつた、時に行年六十有三——

折悪しく現店主は仕入の爲、上京中であり、臨終の床に列するを得なかつた。若松の店に悲電の着せしは十二日の拂曉三時であつた、全店の驚愕悲愁はその極に達し、沈痛の顔のみが右往左往、歸郷の準備、その他に奔走してゐる、喪章を附せる店旗も捧持されて、はる／＼店母の葬儀を飾るのであつた。この凶變に依つて未だ醒めやらぬ新春の陽氣も一時に消え、全店只憂愁の雲に閉ざされた。

超えて十四日——

郷里なる菩提所に於て、盛肅、莊嚴なる葬儀が営まれた。

實に稀なる徳行の人——

村人の哀惜、澎湃として、送列蜿蜒長蛇をなし、恰も村葬の觀を呈したのである。

この日、店でもしめやかなる葬儀遙拜の式を擧げた。

店史四十八年

逝ける店母を偲ぶ

正面に店母の照影を祀り、全員威儀を正して、型の如く佛式に依る。
香烟縷々として新愁をそゝり、哀悼の情又一入であった、茲に、在店の全員が
至誠をこめてさゝげたる弔辭をかゝげ、思ひ出のよすがとせん――

x

店母の英靈にさゝぐ

昭和十年一月十二日、霜夜の星淡く凍りて、寒威骨に徹する 深更二時、齡六
十三を一期とし、哀しくも吾等が店母、率然として永眠せらる、夢か、あらず
――真にこれ青天の霹靂、悲報に接して全員只驚愕、愁憂痛恨極まりて言語に
絶す。

あゝ、英靈永遠に去つて呼べども歸らず、再びあの温顔を拜す能はざるを思へ
ば、涕淚潜々、まさに范然自失の外あらざるなり。
願れば、今を遡る四十有幾年の昔、平和なる瀬戸の波上に浮ぶあの島里を揺籃

とし、立志出郷、徒手空拳、この地によく今日の丸柏を築きし、先代店主の偉
功を頌するあらば、まさしくその半身として黙々全生涯を捧げ盡し、蔭の人、
埋れ木の貴さに生き、血と泪とを以て綴られし老店母が、床しき内助の譽れを誰
か忘れ得べき、伏して感泣景仰するも又、及ばざるを憾みとす。
大愛の權化として、浴く婦徳の龜鑑として、録さんとするも盡す能はず、述べ
んとするも辭足らざるを悔ゆ。

殊に創業双葉の頃より幼若の吾等が蒙りし海山の鴻恩、庇育、何を以てか、こ
れに例ふべき、吾等が若き魂に勵ましと慰めと、而して終生忘れ得ぬ暖かきあ
の母ごころ、靜かに冥目して仰ぐあの慈愛、あの温容、只なつかしき母上にて
ありき、只勿體なき第二の母上にてありき。

おゝ、然るを何等の誤りぞ、天は無情に余命を奪ひ、遂にあの日、あの晨――
曉天の星墜つるが如く、溘焉として泉路に就かる、あゝ、天なるかな、命なる

店史四十八年

逝ける店母を偲ぶ

かな、思ひ出だせば、昨冬二月、陣容整備、伸展途上の店舗へ、久々にて御來駕を願ひ、親しく御愛撫を賜りしこそ、かなしき最後の御下若たらんとは——追憶纏綿として憂愁胸を閉し、暗涙滂沱、徒らに膝を浸すを如何せん、今日代表をして、遙々店旗を捧持し葬送の儀に列せしめたりと雖、茲に在店の生等は肅莊正襟、以て遙拜の式を執行し、虔しみて恭しく英靈にさゝぐ——

朝露一陣の風、不幸にして幽明、境を異にすと謂へども、慈魂永久に吾等を愛護し給ひ、昭々不滅の慰訓を垂れ給ふべし、吾等は胸底に銘してかく信じ、かく斷じ、總員協力、使命の遂行に、理想の達成に、報恩の誠を托さんとす。

只、憾むらくは、人の子の至情として、母を亡へる子羊のごと、いかに淋しくも悲しきことよ、店の若き人々が年毎に故山を訪ひ、疲れたる魂の、やさしき唯一の憩ひ場として、この偉いなる母を慕ひ、その慈顔愛語に接しては、更正奮起せしめられたるものを——

昭和十年一月十四日

丸柏在店全員敬悼

x

今は亡き老店母は、明治六年八月二十四日、店祖と同郷の宮地家に生る、同二十三年、十八才にして、縁あり店祖のもとに嫁す。

當時、店祖は創業苦難の初期にあり、家庭に安住の閑を求むるによしなく、若き妻女は淋しき孤閨を守つて姑に仕へ、寧日なき幾年を送つた、やがて幾人かの母となりたるも老父母への孝養益々厚く、愛兒の教養に心を致し、店祖が後顧の憂ひを一掃して、實に衷誠の限りを傾け盡すのであつた。

店史四十八年

逝ける店母を偲ぶ

聞くならく、當時の店母はゆるく帯紐を解きて寝に就くは稀なりしと云ふ。實に嫁して二十有幾年、血と泪の連鎖に依つて、主なき空宅の主婦として、よき嫁たり、よき母たり、貞節の最高線を歩んだのである。

從順と忍苦の譽は、夙に郷土の話題となり、その徳行は遠近に敬慕の波紋を投げ、村の誇りであつた。

半生に互る別居生活には、他の窺知し能はぬ幾多の苦衷があつた筈である。しかもその間、一言半句の愚痴も漏らさず、徹底せる信に生くるの外何ものもなかつた、殊に店母は、尊神敬佛の念篤く、一切の根底を茲に置き、終始一貫その命運をその力に托し、常に大安心の境地にあつた。

生れ乍らにして備へたるその徳は年と共に光范を發し、人を喜ばせ、他を樂しませることの爲には、水火も辭せぬ輝やかしさがあつた、他の歡びを、己が悦びとし、他の幸福を己が幸福とするあの大愛には誰しも思はず頭が下がるのであつ

た。

この没我至誠の歸結として、家運竝に店運の隆昌を招くに到る、當然と云ふもおろかであるう、然るに店母は店祖のそれに似て、常住坐臥、最底の生活に甘んじ、粗衣、又粗食、而かも他を遇すること萬全を盡し、自らを扱ふこと下婢の如し。

貧しき人に恵むこと、苦しめる人を慰むることは唯一の喜びであり、無私の發露であつた。かくして愛の涙は限りなく灑がれる。

知ると知らざるとの別なく、讃仰するも宜なるかなと思はしめる、徳は孤ならず、必ず隣があつた。

店母は、萬般の事象を悉く善意に解釋する人である、他の良きを賞し、悪しきを言はなかつた、満顔笑を湛えて人に接し、腹立ちたるを見し者、未だなしと聞く――

逝ける店母を偲ぶ

世に、良妻はあるべし、賢母又少しとせず、然れども、吾等が店母の如き、愛に徹したる人、歡びに徹したる人の稀なるを知る。

滔々として、學識高き女性のみ巷に溢れ、農村の老婦人にこの大愛と大慈を見る、再考すべき時世ではある。

以上は郷里に於ける老店母の起居であつた、而して大正六年の夏——長の年月夢に見、幻に描けど、未だ現つには觀得ざりし、わが店の在る若松へ——全く初めての下若をされたのであつた、指を折れば柏原家の人となりて、實に二十有年目——驚異に値する事實である、か弱き手に、婚嫁の日より、他郷に活動する良人を信じ、寢食を忘れて郷家を守り、よく盡し、よく勵みたるも、只、今日の日の樂しみを思へばこそであつた。

徹したる金剛の信！

それは神々しきまでに聖化されたものであつた、妻は良人を信じ、夫は又妻

を信じて貫きたる協力依存の生涯から、この丸柏は發生し、築成されたのである
老店母初の來若こそ、記念すべく、祝すべき日ではあつた。

しかも、この店母は、若松來訪の日より、店員を愛撫慈摩、眞にわが兒の如くされるのであつた、幼き店員達の純心に、温き慈母として印映されたのも不思議はない。

この時は短日月の滞在に過ぎざりしも、店員のよき保護者であり、よき慈母であつた。

爾來、時折郷里と往來し、常に變らぬ全員の母として幾多の麗はしい語り草を遺されたものである。

店に於ける店母の動靜は、最早割愛したい、なぜならば弔辭に示せる如く、只「暖かき母上にてありし」の一語に盡きるからである、晩年は殆んど在郷され、若き店員達が訪郷の度に、あの歡待と、慈愛とに依つて更正せしめ、奮起せしめ

逝ける店母を偲ぶ

たる實例は余りにも多い。

編者は寡聞にして、未だわが逝ける店母の如き慈愛の人を知らない、所謂大愛を翳して天下に呼號し、道を説き、聖書經典を論ずる方々からさへ、求めて得られぬ、或るものを店母は持つてゐられた、溫容玉の如き氣品の中に、ほのかにも光るあのなつかしさ、慈母觀音のそれであつた。

次に一店員の手記を吾等の古き柏苑誌から轉載して、その面影を偲び、この稿を結ぶことにする。

x

焼けつく様な暑い夏のある日――

まだ入店後間のない小さな彼は打ち續く連日の暑さと、不慣れな仕事に辟易したか二階の一隅に打ち伏したまゝまどろんでゐた、と――

「まあこんな處に寝て――疲れたのだろう……」

やさしい聲がして彼の背にはやわらかい毛布がふわりと着せられた。

そして又――

「――こんなに足の裏を黒くして……」

次の瞬間には冷やかな、快よい雑巾で彼の足の裏はきれいに拭はれた。

この時――

うたゝ寝の彼は、しばし感激の涙に咽んだ――

この店はなぜこんなに榮えるのか――と奇異の眼を見張る人があるならば、私は言下にこの一事を示したくなる。

(柏苑誌第二卷第二號拔萃店員K・K記)

x

思ひ出は限りもなく續く――

店母は若く幼き人々の純真なる魂に、この感激を刻み、誰彼の差別なく愛し拔

店史四十八年

逝ける店母を偲ぶ

ぎ、誰彼の區別なく慕はれて、今や静かに地上の營みを了へ、あの世へと急がれた、再びあの慈愛に接し得ぬを思ふとき胸迫る心地がする。
店史上に燦然として輝やくあの功績は、その半をしてこの聖なる店母に歸すべきである。

×

おゝ、なつかしき店母、兒等は訪郷の折ふし、必ずやあの墓域にさまよひ、孤影悄然として涙するであろう。

而して、うつろなる心に手向くる花の一枝は、無量の衷誠をこめたるもの——
英靈にぬかづく兒等は哀し。

使命は重し

×

幾多の缺陷を指摘して

評者は言ふ

「丸柏よ健在なりや」と

×

静かに頭をあげて

吾等は答ふ

「然り！未熟なるが故に健在なり」と

×

祖國 日本！

使命は重し